

天翔け地這う

第一卷 人間燠製

生野以久男

第一章

1

「あれが焼却炉かしら」

焼却炉の投入口から残り火が漏れていた。扉が開放されたままなのか、暗闇の奥に鈍く光る赤い塊がうつすらと浮いて見える。

木実子は一瞬無意識のうちに背筋を伸ばし、右手で筒状のダイナマイトを強く握り締める。

裸電球の薄暗い街灯が産廃処理場のゲートの近くにひとつあるだけで、トタン板で囲まれた処理場の敷地のなかは暗闇が支配していた。ジーパンに黒っぽいジャンパーを纏った彼女は身を屈め、暗闇に溶け込んでいく。じつと目を凝らし、積み上げられた廃材や古タイヤの狭い隙間を焼却炉へにじり寄る。

突然、足音がした。

ひとりじゃない。二人か三人かの足音だ。

敷地内は無人的はずだった。表向きは野焼きができなくなって、多くの産廃処理場には小型の焼却炉が設置された。だが人手がかかるため、深夜には焼却炉の火を落とし、翌朝の火入れまで廃材やゴミなどの焼却を休止するところが多かった。その分、大きな穴を掘ってそのなかで廃棄物を燃やす野焼きが行われた。ことに夜陰に乗じて違法な有害廃棄物を燃やす夜間の野焼きが横行した。

この処理場も深夜には無人になることは調べがついていた。それなのに

……、今夜は特別なのか。焼却を禁じられているものを燃やそうというのか。

足音がなかなか近付いてこない。彼女は廃材の山のかげに身を隠し、身体を固くして足音が通り過ぎるのを待った。息が詰まりそうだった。

一瞬、焼却炉の爆破活動は今夜で最後にしようかと思った。こんなことをつけていても、ダイオキシンの汚染を根絶できないことは分かっていた。それでも彼女はこうするほかなかった。耀の行動を真似ることによって、ひとり旅立ってしまったわが子と繋がっていたのだ。というより、無意識のうちに、不可解に思えた耀の行動を真似ることによって、遠く離れてしまった耀を理解しようとしていたのかもしれない。

懐中電灯の光が走る。足音が近付く。

一瞬、光が彼女の背を捉える。つぎの瞬間、光は向きを変え、足元を照らす。

懐中電灯を持った男を先頭に、男が三人、それぞれ大きなビニール袋を両手でかかえている。これから焼却炉で燃やそうというのか。それとも野焼き用の穴に放り込むつもりか。

最後の男が通り過ぎた。消毒薬の臭いが微かに尾を引く。暗闇のなかに男の姿が消えると、彼女は屈んでいた身を起こす。

廃材の端が肩に触れた。つぎの瞬間、廃材が滑る音が出た。彼女は急いでその場を離れた。

彼女が山積みされた古タイヤのかげに身を寄せると同時に、うず高く積み上げられた廃材の山が音を出して崩れ出した。

ほこりが舞い上がる。彼女はタオルで顔面をおさえ、咳を堪えた。

「クソ……」

男の悲鳴がした。

「大丈夫か」

彼女の耳元でうちにこもる低い男の声がした。伸びた大きな手が彼女の左手首を鷲掴みにする。

「こつちだ」

彼女は手を引かれるまま、男のあとについて走り出す。後ろから懐中電灯の光が追って来る。

「そのヤツを捕まえろ」

懐中電灯の男が叫ぶ。

いつの間にか、閉ざしてあったゲートのトタン張りの扉が大きく開かれ、敷地の空地に大型のダンプカーが三台列をなして駐車している。

男の叫び声に駐車している車の運転席の窓から、男たちが一斉に顔を突き出す。ひとりの若い男がドアを開け、地上に飛び下りた。

懐中電灯が近づく。

男は彼女の手を引き、前から迫る若い男をかわし、塀に沿いに走る。

ゲートのまえで、背丈が二メートルにある大男が長く太い腕を広げ、近づくとふたり待ち構えていた。

「ダイナマイトよ。退きなさい」

彼女はダイナマイトをかざす。大男が怯んだすきに、ふたりは外へ出た。大男が追う。ふたりは走る。

街灯の明かりの届かないところに、車が停めてあった。彼女は振り返る。追手の姿はなかった。

「早く乗って」

聞き覚えのある声だった。

「森野さん？」

車は急発進した。彼女は前のめりになりながら、ハンドルを握っている黒いシルエットに目を向けた。森野なのか。

後方で車のライトが光った。

光のなかに、森野の横顔がくつきりと浮かんだ。

やはり森野だったか。それにしても、なぜ森野なのか。

木実子には不思議そうに目を凝らし、森野の横顔をじつと見つめる。

森野から預かった段ボール箱一杯のダイナマイトを持って、家を飛び出してから何日も経っている。彼女は転々とし、住民泣かせの悪名高い産業廃棄物処理業者を探しては焼却炉をつぎつぎと爆破して歩いた。無力の住民に代わって悪辣な行為を繰り返す悪徳業者を懲らしめることは意義のあることであり、痛快なことでもあった。急に、自分がスーパーマン（ウーマン）になったような気さえするのだ。

「しつかり掴まって」

後方の車が執拗に追って来る。

大きくカーブをきる。車は照明のない暗い夜道をヘッドライト頼りに猛スピードで駆け抜ける。山腹を切って造った林道だった。右手が谷側で、左手が山側の崖だ。

車は車輪を軋ませ、谷側のガードレールに沿ってカーブを切り、走り抜ける。

狭い道だった。対向車とすれ違いができるのだろうか。不安が過る。彼女はふと、この道は行き止まりなのではないかと思った。

フロントの把っ手を掴んでいる彼女の両手は汗でべとべとだった。全身に汗が噴き出し、汗が背筋に沿って流れ落ちていく。

カーナビに目をやると、進行方向の前方に交差する道路が表示してあった。

後方の車が急にスピードを落とす。

交差する道路をそのまま直進すれば、山間部を抜け、街へ出るはずだった。追手のライトも届かず、車は暗闇のなかをひたすら走る。

「なんだ、あれは……、しまった」

森野が突然叫ぶ。

ヘッドライトに黒い物体が浮かんだ。ダンプカーだ。

二台のダンプカーが直進方向と左折方向の道路の中央に、道路を封鎖するように停車しているのだ。

後方から、追手のヘッドライトが迫ってくる。

森野は大きくハンドルを右に切る。

木実子は不安に駆られた。暗闇のなかを走る道路は一段と狭い感じだ。

両側の木が茂り、枝が覆いかぶさるように伸びている。この道路は行き止まりにちがいない。カーナビにもなにも表示がなかった。

不吉な予感が全身を包む。後方のヘッドライトがちらちら漏れて来る。

前方に街灯の光が見えた。

「あ、あれは……」

産廃処理場のゲートを照らす街灯だった。

2

「お姉ちゃん、ここはどこ。ママは……」

未佐はテーブルの椅子に腰を下し、所在なげに辺りを見回している。といても、耀がいままで寝ていたベッドのほかに、周りにはなにもないのだ。果てしなく広がる空間の真ん中に小さなテーブルと二脚の椅子がぼつんと置いてある。

耀が椅子に腰を下ろすと、ベッドもいつのまにか消えてしまった。

微かな足音が近づく。

突然、目の前に赤毛の長い頭髮にひげ面のひとりのすらりとした背の高い男が現れた。バレリーナのようなタイトをつけている。上半身は長袖のシャツにコルセットのようなベストだ。タイトとシャツは白で、ベストは真紅のベルベットだ。

男はにこやかに耀と未佐に微笑みかけ、付いて来るようにと手招きして歩き出す。ふたりは導かれるまま、男の後ろに付いていく。

男は足音を立てずに風のように歩く。

未佐は耀の手を引き、男に遅れまいと足を運ぶ。未佐はふと自分の身体が宙に浮いているように感じた。

目の前に、いくつもの大きな建物が並んでいる。ドアを開けて、ひとつの建物のなかへ入った。

「ここが『天の基地』の日本部局のブースです。おふたりがいらしたときはここを自由にお使いください。最新の設備を揃えていますよ」

金属性の甲高い声が響く。

エントランスホールにつづいて奥へ向かって空間が広がり、その中央には両側に十脚の椅子が並んでいる大きなテーブルがあった。奥の壁が大きなスクリーンとなつている。両側には小部屋があるのか、閉め切ったいくつものドアが並んでいる。

「これは会議用に用意されたテーブルと椅子です。さあ、どこにでもどうぞおすわり下さい」

赤毛の男はテーブルのほぼ中央に席を取り、ふたりに椅子をすすめる。

「あなた方をここへ迎えることができて大変嬉しく思います。あなた方にお願ひしたいことがあるのですが、そのまえになにか質問があれば、なんなりどうぞ……」

金属性の透명한甲高い声だ。

「ここはどこですか」

未佐は真正面に座る颯爽とした風貌に似合わない声の主をじっと見る。

「宇宙には生命体が存在する星（生命星）はいくつもありますが、『天』の一角で、われわれはこれらの星がどのような状態にあるかを常にチェックしているのです。異常や問題が見つければ、それを取り除き、あるがままの状態に戻すことにしています。ここは生命体が存在する星のひとつである地球を担当する部署です。その責任者のアムン（Annun）です。わたしは日本を担当する部局の長も兼ねています」

「でもわたしたちがどうしてここに……」

あのととき、爆破した焼却炉の破片を受けて、ふたりとも死んだはずだ。死んだ人間が生き返ることがあるのか。未佐は耀を振り返る。

アムンは未佐に目を向ける。一目で未佐の胸中を察することができるらしく、微笑みながら、説明をはじめた。

地球環境の状態が近頃とみにおかしくなり、地球の生命体に危険がおよぶ状況にある。そのなかでも日本の状況が極めて憂慮すべき状態である。その原因を追究し、対策を講ずることになった。そのための要員を探していたところ、適当な人材が見つかったので、招聘したのだという。

「あのととき、わたしと耀くんは……」

「まだ、かすかに息をしていたので、すぐここへ運んだのです」

「でも、わたしは非力ですし、耀くんはまだ幼い。あなたの期待に応えることはできそうにもありませんが……」

責任者はしばらく耀に目を向けていた。それから、耀に「立つてごらん」と言った。

耀は椅子から飛び下りる。

未佐が振り返ると、凜とした青年が立っていた。

「だれ？ 耀ちゃんなの？」

「ふたりにはすでに特別の能力が備わっているのですよ。どんな能力が備わっているか、いろいろ試して見て下さい。あなたたちがダイオキシン汚染をなんとか解消しようと行動を起こし、焼却炉爆破を実行に移した。与えられた特別な能力を活用してもう一度やってみて下さい。日本はすでにさまざまな合成化学物質で汚染されています。ダイオキシンや内分分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）もそのひとつですね。これらの汚染から日本を救い出すのです」

いま日本を舞台に、私腹を肥やすことしか考えないさまざまな勢力が渦を巻いて陰謀の限りを尽くし、勢力争いをしているという。行動するときには、十分注意して、陰謀かどうかをしつかり見極め、決して騙されないように、と責任者は念を押しした。

「このモニター用のスクリーンには、いつでも日本全国を写し出すことができます。たとえば……」

責任者がスイッチを押すと、壁一面のスクリーンに映像が浮かんだ。ズームアップしていく。

トタン板の扉を巡らした産廃処理場のゲートのまえに数人の男たちがたむろし、近付いて来る車のほうを見て話している。そのなかのひとり手がで合図すると、ゲートのなかからダンプカーとシヨベルカーがするすると出てきて、道路を封鎖した。

男たちは車を待ち伏せているのだ。

近付いて来る車の窓から身を乗り出した女が円筒状の筒を振り回している。もう一方の手に火の付いたライターを持って、なにやら叫んでいる。

「あ、ママだ」

耀が叫んだ。耀はもとの姿に戻っていた。

たむろしていた男たちが一斉に散った。

車がダンプカーに遮られ、すれすれのところで止まる。

ダンプの陰から車に忍び寄った男が手を伸ばし、女の手から筒を奪った。

男たちが車をめざす。ドアをこじ開け、女を車から無理やり引きずり出した。車の反対側のドアから、男が引きずり出された。

「森野さんだわ」

未佐は耀の手を取って、抱きかかえる。

アムンはスクリーンのまえで、じつとふたりの様子を窺っていた。

3

木実子は馬乗りになった大男に両手を押さえ付けられても、なんとか振りほどこうともがく。足を押さえようとする男を足蹴りする。

「ふてい女だ。ダイナマイトを振り回すとは。縛っておけ」

ボスらしい太った大男が命じる。

「焼却炉爆破の犯人だ」

「吊るし上げる」

「男も一緒だ」

男たちが口々に叫ぶ。

「その辺に寝かせておけ。あとで警察に引き渡せ」

ふたりはロープでぐるぐるに巻きにされ、担がれて敷地内に運ばれると、廃材のわきの空地に投げ出された。

木実子は投げ出されたとき、身体を丸めることができず、後頭部をしたたか打った。

彼女はぐったりして、そのまま動かない。

森野はさらに乱暴に投げ出されたが、首を縮め、後頭部を打たれずにすんだらしい。だが地面に落ちたとき、左肩をしたたか打った。

身動きもできず、じつとしているふたりを放置したまま、男たちはわいわい言いながら、散っていった。

しばらくすると、産廃処理場のまわりに集っていたダンプカーがぎぎぎに動きだし、去っていった。敷地内に駐車していたダンプカーやシャベルカーもつづく。

静寂が戻った。

森野は痛みを堪え、首を上げ、辺りを見回す。暗闇のなかに、街灯の薄明かりが差し込み、物影がかすかに見える。

野焼きのあとが燻っているのか、時折、異臭のする煙が襲う。塩化ビニルやさまざまなプラスチックゴミが燃えたときの臭いだ。

目を凝らすと、一メートルほど離れたところに、ロープでごぼう巻にさ

れた木実子が仰向けになって横たわっていた。

「大丈夫？ 怪我は……」

返事がない。身動きひとつしない。

森野はごぼう巻の身をくねらせ、移動を試みる。左肩が痛い。我慢してもう一度身体を屈伸させる。なかなか進まないが、一回くねり、もとに戻すと、数センチほど前に進んだ。彼は同じ動きを繰り返す。そのたびに、左肩から全身に痛みが走る。それに耐え、何度も繰り返し返した。全身から汗が噴き出る。

ようやく、木実子の頭に近付いた。彼は頭で彼女の頭を押した。

反応がなかった。軽く突く。それでも反応がなかった。

気を失っているのか。それとも……

異臭が強くなった。廃材が燃え出したのか、ぱちぱちと音がする。彼は気がきでなかった。

積み上げた廃材の山に燃え移れば、ごぼう巻のふたりは炎に焙られて焼け死ぬことだろう。でなければ、異臭の満ちた煙りに焙られ、燻製人間となるのか。

それとも、そのまえに火災に気付いた消防車がやってきて、水を撒いてくれるだろうか。

動くたびに激しい痛みが走る。堪え難い異臭が襲う。

彼は木実子の頭を突く。なんとかして廃材から離れたかった。かといって、木実子を放置することはできなかった。

次第に、意識がもうろうとしはじめる。彼は最後の力を振り絞って、もう一度、木実子の頭を強く突いた。ごつんと音がしたが、びくともしない。

「ダメか……」

次第に、意識が薄れていく。彼は目を瞑り、これでわが人生も終わりかと思う。

4

突然、木実子が咳き込んだ。身体が動いた。

「ああ、臭い」

木実子は何度も咳き込む。

「臭いわ。堪らないわ。ああ……、なんとかして……」

身体を捻った拍子に、男の頭と鉢合わせになった。

「痛い……。だれ？ 森野さんの」

木実子は必死に首を曲げ、森野の顔を覗く。

「ああ……。きみか……」

森野が意識を取り戻したのか、声を上げた。

煙だ。煙がもくもくと立ち上り出している。

「早く、ここを離れなければ……」

「でも……」

木実子は動くことができない。

「身体を左右にくねらせ、肩と足を使って……、こうするんだ」

森野が身体を動かして見せる。

「できないわ」

「野焼きの火が廃材の山に燃え移っているらしい。さあ、早くしないと焼け死んでしまうぞ」

「うん……」

「身体を左右に揺するんだ。揺すりながら、肩を交互に持ち上げ、両足で地面を蹴るんだ」

ふたりは何度も同じ動作を繰り返す。だが遅々として進まない。

動かすたびに、ロープが胸を締め付ける。それでも彼は左右に身体を揺すりつづける。ロープが胸に食い入る。必死に何度か繰り返すうちに、苦しくてとうとう動けなくなってしまう。

彼は静止して、何度も口から大きく息を吐き、呼吸を整える。木実子はじつとして動かない。

煙が勢いを増していく。一面に異臭が漂い、廃材の燃える音がする。

彼は異臭をまともに吸い込んだ。激しく咳き込む。次第に意識が遠のいていくのを感じた。

意識が遠のいていくなかで、ふと、身体がなんとなく自由になったような気がした。彼はと切れと切れになった意識をたぐり寄せる。彼は夢中で身体を動かす。

だが身体は固く縛られたままだ。汗で濡れた身体の錯覚だったのか。

「ダメか……」

彼は力なく、呟く。足を蹴った。

足首が微かに動いた。ぐるぐる巻きになっている足首のロープが弛んできたのか。何度も身をくねらせ、地面を這っているうちにロープが擦れて結び目が解けたらしい。

彼は両足に力を入れて幅を広げていく。少し広がった。彼はふたたび身体をくねらせ、意識的に足首のほうのロープを地面に擦り付けるようにして、ゆっくり前進する。足首のロープが抜けていくように感じる。彼は一

心に同じ動作を繰り返す。

ロープが足首からなかなか抜けない。何度やっても同じだ。

ふと、靴も一緒に脱げばいいかもしれないと思った。両足の踵を合わせ、一方の靴の踵をもう一方の靴の踵で押す。

思ったほどの力も加えずに靴がぼろり脱げ落ちた。靴を脱いだ足で足首にからまつているロープを押し退ける。そしてぐるぐる巻きのロープから片足を引き抜く。

自由になった足で、もう一方の脚のロープを押し退ける。

彼は下半身のロープが取れたところで、今度は地面で身体を回転させ、上半身のぐるぐる巻きのロープの解きにかかった。

廃材の山が煙り出した。異臭を放つ煙がもくもくと立ち上り、あたり一面に広がり出している。

彼は急いで脱いだ靴を拾い、木実子を探す。どこにも見当たらなかった。

廃材の山に近寄ると、木実子はその横でぐったりしていた。ロープでぐるぐる巻きにされた姿は、暗闇のなかでは廃材のようにしか見えなかったのだ。

猶予はなかった。燻っている廃材がいまにも火を噴きそうであった。火を噴けば、一面火の海となる。

彼はぐるぐる巻きの彼女を引き摺り、廃材の山から離れる。

突然爆発音がした。廃材の山から大きな炎が立ち上った。火の粉が飛び散った。飛び散った火の粉が宙を舞う。

彼はぐるぐる巻きの彼女を抱え、雨のように降り掛かる火の粉を払い、ゲートへ突進する。扉をこじ開け、産廃処理場の外へ出た。

ドアは開けたままの車が一台、道路に放置されていた。

ロープを解き、彼女を後部座席に横にすると、彼は車のキーを回し、エンジンがかかる。

遠くで、カネの音とサイレンの音がした。

5

「もう止めたほうがいい。相手に感付かれました。危険だ」

森野は後部座席の木実子を振り返る。憔悴しきった顔は煤で汚れて、年老いた別人のようだった。

「……………」

木実子は口をきつく閉じ、恨めしそうな目でじつと森野を見ている。

「今回はどうにか逃げて来れたけど……………」

森野はぐるぐる巻きのロープから逃れ、廃材の火災現場から生還できたことが不思議でならなかった。木実子を一緒に連れ出すことができたことは奇跡的だった。いまもってどうしてそんなことができたのか、そしてそんな力がどこにあったのか、彼にもよく分からなかった。

民間の小規模産廃処理場を狙った焼却炉爆破事件が相次いだ。森野は木実子の仕業にちがいないと思ひ、あとを追っていたのだ。見付け次第、ダイナマイトを取り上げ、すぐにも止めさせるつもりだった。

彼は彼女にダイナマイトを預けたことを悔いた。彼女は発破用のダイナマイトがなくなるまで爆破をつづけるにちがいない。そんなことをすれば、いつかは捕まってしまう。それよりもいづれ爆破に巻き込まれ、耀や未佐の二の舞いとなるかもしれない。なんとしても早く止めさせたかった。

昨夜、ようやく、産廃処理場の近くで彼女らしい後姿を見つけ、あとをつけていたのだった。

「あなたから預かったダイナマイトがまだまだ残っているわ」

木実子はやつれた顔でぼつんと呟くように言うと、車の窓ガラスを下げ、虚空を見上げる。

彼はドアを開けた。朝の冷気がすうっと通り抜ける。外へ出て、空を見上げる。空には絹雲が広がっていた。

彼は大きく息を吐き、胸一杯に空気を吸い込む。昨夜吸い込んだ煤と臭気に満ちた空気をすっかり吐き出したかった。

水のせせらぎがする。近くを小川が流れているのだろうか。両側には高い山並みが迫り、その間のわずかな平地に畑が広がっていた。

彼は辺りをきよろきよろ見回しながら、何度も深呼吸を繰り返す。

昨夜、廃材の山が燃え出した産廃処理場から夢中で逃げ出し、方向も分からず、夜道を疾走したのだった。

「ここはどの辺かな」

彼は木実子を振り返る。

彼女は窓枠のうえに顔を伏せていた。疲れて眠り込んでしまったらしい。音を立てずに運転席に戻ると、彼は目を閉じた。

6

「失火原因は……………」

「火元はどこかな」

昨夜の火事の名残か、産廃処理場のゲートは開け放されたままだ。ゲートから産廃処理場の敷地内に入り入れた車から、二人の消防署員が話ながら降りる。

トタン板で囲まれた産廃処理場の敷地には廃材の燃えカスや燃え残った古タイヤが散乱しているが、焼け跡の火はすっかり消えている。ゲート近くまでうず高く積み上げられていた廃材の山が燃え尽くしてしまったせいか、いやに広々と見える敷地の奥に、低いずんぐりした煙突の小さな焼却炉と薄汚れた壁のこじんまりとした古びた作業場が姿を現していた。

ゲート近くにプレハブ小屋の事務所らしい建物があり、背の低い煤けた顔の初老の男がひとりいたが、話の分かる者はいなかった。責任者は警察に呼ばれて出かけたばかりだという。

消防署員が焼け跡を見て歩く。

「廃材は殆ど燃え尽くしていたが、古タイヤの多くが燃えずに残っている。」

「タイヤに燃え移らなくてよかったな」

「消火が間一髪で間に合ったか。それにしても火元がどこか難しいな」

「まんべんなく燃えてしまつて、これじゃ、火元を特定できないかもな」

「タイヤに燃え移らないようにするのが精一杯だったからな」

「放火じゃないかと言っていたが……」

「え？ 誰？」

「ええと……」

「なんでも、昨夜、二人連れの焼却炉爆破犯がここに入り込んでいたという話ですよ。社長が……」

消防署員が声のほうを振り返る。少し離れて付いてきた初老の男だった。

「焼却炉爆破犯が？ どうしてその二人連れが焼却炉爆破犯だと分かった

のかな。焼却炉はなんともないようだけど……」

年嵩のひとりが尋ねる。

「社長の話では、逃げるるとき、女がダイナマイトを振り回していたそうだ」

「へえー、ダイナマイト……。取り逃がしてしまったの」

「一度は捕えたらいいですがね」

「捕えた？ それで……」

「……………」

初老の男は口をもぐもぐさせたが、声が出ない。

「その女が火をつけたというのかね。それとも……」

消防署員はさらに問いかける。

「……………」

男はなぜか口を開こうとしない。

消防署員は初老の男に背を向け、焼け跡のなかに入っていく。

「ダイナマイトが破裂した形跡があるかな」

焼け残りの廃材をひっくり返したりして焼け跡を丹念に調べているもう

ひとりの署員に声をかける。

「そんなのはないですよ。灯油をかけて火をつけたじゃないのかな。野焼

きをやる時の手ですよ。これは」

「うん、そうかもしれないな。その辺に灯油の空き缶があるかもしれない

な」

消防署員は調査範囲を広げていった。

「おい、何やっているんだ」

だぶだぶパンツの背が飛び抜けて高い身体の大きい男が立っている。産

廃処理場の責任者だった。警察から戻ってきたらしい。

大男は消防署員の説明を苦々しげな顔付きで聞き流すと、顔の煤けた初老の男を呼び寄せる。

「いいか、放火女はまだ遠くに行っていない。早く、探すんだ。取っ掴まえて引きずり出せ」

大男はだぶだぶパンツをなびかせ、足早に去っていった。

7

「ダイナマイトが残っているのよ」

「こんなことをやってもダイオキシンの汚染はなんら改善しない」

「ダイオキシンをまき散らしている無法者を野放しにしておいてもいいというの」

「そうは言っていない」

「どこがちがうの」

「なんにもそんな連中をきみがやつつけなくてもいいと言っているだけだよ」

「誰がやるの。誰もやらないじゃないの。小型焼却炉は規制外だというし、行政に野焼き禁止を訴えてもお茶を濁すだけ。いくら苦情をいっても、行政はいつも何処吹く風だし……」

「かといって、きみが代わりにやることではない」

「やりたい放題のあの連中にはこうするほかないのよ。ここを徹底的にやれば、他のところも少しはよくなると思うのよ」

「徹底的に……」

「そう。徹底的にね。そうできれば、森野さんの心配もなくなるかもしれ

ない」

「どういうこと……」

「いまの経済社会システムは生産、消費そして廃棄の一方向のいわゆるワンスルー構造よね。このようなシステムでは生産物が廃棄されればゴミとなってしまう。ゴミが処理されなければ、ゴミが山積していたところがゴミの山で埋まることになるわ。そうなれば、このシステムは破綻して、生産どころじゃなくなるじゃないの。わたしの狙いはそこにあるの」

「ふむ……、産廃処理場を攻撃してワンスルー構造の経済社会システムを糞詰まりにして、システムそのものを破滅させようというわけか。遠大な狙いだね」

「ワンスルー構造のシステムの問題性や危険性を実感させて、ゴミの焼却処理を止めさせたいのよ。ワンスルー構造システムに代えて循環構造システムにして、ゴミを一〇〇パーセント再資源化してふたたび生産に利用するようにすれば、ゴミは生じないはずよね」

「その実現をめざして、焼却炉の爆破をつづけるわけ」

「そうよ。誰もやらないから、わたしがやるほかないわ。耀もいなくなつたし……」

「全国には産廃処理場がゴマンとあるんだよ」

「たとえどんなに多くとも、ひとつひとつ潰していくほかないわ。ひとつ潰せば、確実にひとつ減る」

「ひとつ潰しても、ふたつが増えるかもしれない」

「そのときはふたつを潰せばいいわ。屁理屈はいいの」

「ひとりではできない」

「じゃ、みんなやればいい」

「みんなで……」

「産廃の焼却処理全廃をめざして全国的なダイオキシン汚染撲滅運動を展開するの。そして焼却炉爆破の実行協力者を募り、みんなで同時に決行するのよ」

突然、大きな声が響いた。

森野ははつとして目を開き、後部座席を振り向く。木実子は相変わらず同じ格好で眠ってる。微かに寝息がする。

彼はじつと木実子を見た。あれは夢だったのか。彼はもう一度夢のなかの会話を思い浮かべる。

「ダイナマイトが残っている」と言った木実子の声が蘇る。

彼は脳裏に浮かんだ夢のなかのいかにも不機嫌そうな表情の木実子の顔にじつと目を据える。そのとき、やはり、焼却炉の爆破をつづけようとしている彼女がただ耀のあとを追おうとしているだけではないのか、という思いが彼を捉えた。

木実子の恨みがましい目が浮かんた。それは不意に現れた邪魔者を見る目だった。それにもかかわらず、願いもしないのに、彼女のまえに不意に現れ、まるで木実子の救い主かのように振る舞っていたのだ。

突然、彼の脳裏に、盛んに口を動かしている未佐が現れた。彼になにか話しかけているらしい。彼は耳をそば立て、未佐の話を聞き取ろうとするが、全然聞き取れない。未佐もようやくそのことに気付いたのか、後ろを指差す。そこにじつとこつちを見ている耀の姿があった。

彼は強い視線を感じて振り返った。いつ目を覚ましたのか、木実子が不思議そうな目をして彼をじつと見ている。

「耀くんのあとを追ってはいけない」

彼は木実子の目を覗く。

「……………」

彼女はしばらく森野を見ていたが、黙ったまま、あらぬほうに視線を移す。

「ダイナマイトはどこにある。ぼくが預かる。この辺ではもう仕事はできない。顔は見られたし、危険だ」

ダイナマイトは工事用（発破用）のもので、学生時代に彼が過激派の友人から預かったものだった。

友人は思い詰めた目をして、深夜、ガムテープで堅く封をした小型の段ボール箱をかかえ、突然アパートに訪ねてきた。友人は中身を伏せたまま、しばらく預かってくれと言って、あたふたと姿を消した。だが二度と姿を現すことはなかった。それ以来、段ボール箱は押し入れの奥に入ったままだった。二度目の引越しのとき、間違って開けてしまった。

筒状のダイナマイトがびつしり詰まっていた。そのまま、彼は押し入れの奥へしまったが、落ち着かなかった。未佐から請われて、そのなかから二本を渡したが、どう処置していいか分からず、アパートを引き渡したとき、木実子に預かってもらっていたのだった。彼女はそれを持ち出したのだ。

彼の声が聞こえたのか、聞こえないのか、彼女は相変わらず、あらぬほうに視線を向けたままだ。

「顔も知られたし、この車も手配済みだろう。もう……」

木実子は目を吊り上げ、きつとなつて、振り返る。彼は目を大きく見開き、彼女をじつと見た。そして彼は彼女の目に目を据え、口を開くのを待った。だがいくら待っても、彼女の口は閉じたままだ。

「もう、無差別に焼却炉を爆破するのは止したほうがいいよ。エンドレスだし、効果もあまり期待できないんじゃないかな。連続爆破を恐れて廃業する業者が続出すればいいが、やつらはそんなヤワではないだろうし……」

彼女は相変わらず、口を閉じたままだ。彼はかまわずつづける。

「やつらを相手にするのなら、作戦を変えたほうがいいと思う。やつらは一律同じ産業廃棄物を扱っているのではないらしいし、産廃処理処分場の立地地点も千差万別だ。経営実態も様々だね。恒常的に事業を継続しているものもおれば、一時しのぎの荒稼ぎをするタイプをいる。雇われて事業を営んでいるものもおれば、自分でダンプを一台もって産業廃棄物の運搬だけを請け負っているものもいる……」

彼はときどき木実子を盗み見るが、変化はない。彼の思いはぐらつくが、それでも彼は熱を込めてつづける。

「いろいろ調べていくと、どうもほかのとあまりにもかけ離れすぎて、ちょっと理解できないタイプのものがあることが分かった。普通は産業廃棄物の搬入の便を考えて、処理処分場は高速道路の近くとか、とにかく道路状況がよくアクセスのいいところに立地されるが、それらはそうじゃないんだな。人目のつかない山奥の谷間とかなんだ。なぜか……」

木実子の顔がぴつくと動く。彼は気付かぬ振りをしてつづける。

「処理場建設がとん挫して、いつの間にかゴミの投棄場になって大量の不法投棄ゴミが放置されたままだったりするところもあるが、山奥に産廃処分場がつくられているケースをよく見かけてるんだ。そこがなぜか、水源地のそばであったり、ダム湖の辺であったりしている。そんなところは、一般的にみて、当然そのような施設は避けるべき地点だよ……」

彼は木実子を盗み見る。

「なにか深い訳がありそうなんだ。一度よく調べてみようと思ってるが、もしかしたら、こういう地点を爆破のターゲットにしたら効果的かもしれない」

彼は木実子の様子を見ているうちに、彼女の決心は堅く、いくら説得しても焼却炉爆破を止めることはないにちがいないと思えてきた。そこでは作戦を変え、ターゲットをしばらく込むことにしたのだった。山奥の産廃処分場であれば、人目も付きにくく、それだけ捕えられる危険も少なからうし、こうすれば彼自身、彼女と行動をともし易くなるにちがいないのだ。

彼は産廃処理場での焼却炉連続爆破事件を耳にしたとき、それは彼女の仕業であり、いつかは彼女が自爆を執行するのではないかと恐れた。そして彼女探しをはじめたのだが、彼女を見つけ出したとき、彼に向けられたまるで邪魔者に対するような恨みがましい目を思い出し、自分の予感が間違っていないことを確信したのだ。

実際、彼女の様子では、いまでさえ彼に助けられたことが、不満そうに見える。

かといって、このまま別れてしまえば、彼女は間違いなく一人息子耀のあとをまつしぐらに追い続けるにちがいない。彼は木実子を一人にするわけにはいかなかった。なんとしても行動をとにもするのだ。

それにしても木実子がいざれ出奔するかもしれないことをうすうす予感しながら、なぜ無責任にも彼女に大量のダイナマイトを預ける気になったのか。引越しを重ね、転々とする自分が保管しているより、彼女の家に置いてもらうほうが安全だと計算したのか。理由はなんであれ、厄介なダイナマイトを彼女に押し付け、自分だけが身軽になってのうのうとしてい

たことは許せなかった。

彼はなんとしても彼女を自分のそばに引き止めておきたかった。

8

「深い訳って……」

木実子は森野に目を向ける。

彼女は別に彼の話に興味があるわけではなかった。昨夜、突然現れた森野に驚き、彼女は気持ちの整理ができずにいたのだ。

実際、暗闇で不意に腕を掴まれ、廃材のかけに引きずり込まれたときから、彼女は自分の行動を制御できずにいた。自分でありながら、自分ではないのだ。自分では動くことができないと思っているのに、もうひとりの自分が操り人形のように自在に動く。腕を掴まれたときから、彼女はわれながら半ばあきれて操られて自在に動く自分を眺めていたのだった。

森野の聞きなれた咽の奥でこだまするような声を聞き、いまようやく、彼女は夢から覚めたような気がした。

森野は以前より身体が引き締まって精悍に見える。いままでどこを転々としていたのだろうか。いろいろ聞きたいことが山ほどあるのに、彼の顔をじつと見ているうちに、すべてが分かったような気分になった。そして彼女は同じ時間を彼とずっと一緒に過ごしていたような気がしてくるのだった。

「え？ なんだったって……」

森野は振り向き、目を大きくする。

「深い訳があると……」

彼女は無表情で繰り返す。

「ああ、産廃処分場のことね。なにかよく分からないけど、ただなんとなくそんな感じがするんですよ。誰かが資金を出さなければ、あれだけの工事はできません。どこから資金が出ているのか調べてみたのですが、それがヘンなんです。外国資本がからんでいるらしいが、外資系企業がこの種の事業に投資するとは一寸考え難いし……。なにか特別の訳があるのではないかなということですよ」

森野は自信なげに、最後は独り言のようにぶつぶつと呟く。

人間活動から出るゴミ（廃棄物）は種々雑多であるが、現代文明の巨大化高度化大量化にともない、ゴミ（廃棄物）もまた、巨大化高度化大量化の一途を辿る。ゴミ（廃棄物）には有形の固体のものから、気体や液体のものも考えられるが、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」では、廃棄物を一般廃棄物と産業廃棄物の二種に区別する。家庭などから出るゴミ（廃棄物）が一般廃棄物で、それ以外が産業廃棄物である。廃棄物全体のうち、産業廃棄物は九割を超える。

一般廃棄物は、原則として、地域ごとに市町村が収集処理するが、産業廃棄物は事業活動に伴う廃棄物であり、処理は事業者の責任である。「事業者は、その事業活動に伴って生じた廃棄物を自らの責任において適正に処理しなければならない」（廃棄物の処理及び清掃に関する法律第三条）。だが、同法で産業廃棄物としてとり上げているのは一九種類である。逆に言えば、この一九種類に該当するものだけが産業廃棄物であるということだ。

これに該当する産業廃棄物は、燃え殻、汚泥、廃油、廃酸、廃アルカリ、

廃プラスチック、紙くず、木くず、繊維くず、動植物性残渣、ゴムくず、金属くず、ガラス・陶磁器くず、鋳滓、建設廃材、動物の糞尿、動物の死体、ばいじん、以上の廃棄物を処分するために処理したもの、といった一九種類だ。

ところが、これらに類するものでも、これに該当しないものがある。たとえば、ウラン鋳採掘や濃縮過程、原発の運転や事故等で大量に発生する放射性廃棄物だ。このほかにも、大気中へ放出されるガス状の大気汚染物質、河川・湖沼や海域に放出されて水域を汚染する水質汚染物質なども廃棄物とは別の扱いだ。

廃棄物を環境に投げ捨てられるものと大きく捉えれば、これらのほかにも、燃焼や冷却にともなう廃熱、あるいは電波や電磁波といった無形のものもゴミ（廃棄物）ということになるだろう。

地球環境との関係で廃棄物を全体的に捉えなければ、廃棄物による環境汚染や環境破壊に対する対策は不完全なものとなり、結局、対策はあつてなきがごとしとなってしまう。それにもかかわらず、現実では、法制度や行政組織が勝手に線引きして、それぞれ扱う廃棄物の範囲や種類を個別に決めて都合いいように規制しているのだ。

「産廃処分場？」

「そう。これは産業廃棄物の最終段階の処分場で、まあ、産業廃棄物の行き着く先とも言えますか」

廃棄物の処理過程には、まず、収集運搬段階があり、つぎが廃棄物の焼却・破碎・圧縮といったことを行ういわゆる中間処理の段階である。最後が、中間処理を経た廃棄物や中間処理の必要のない廃棄物（陶器などのいわゆる無害な不燃物）を埋め立てなどで最終的に処分する段階だ。これら

と並行して、リサイクルなど廃棄物の再資源化が行われている。

「産業廃棄物の最終処分場ですか。焼却してしまえば、これで終わりということならないのですか」

木実子がターゲットにしてきた焼却炉は中間処理の段階のものだった。

「廃棄物を焼却しても焼却炉に焼却灰が残る。これは一九種類のなかの「燃え殻」に該当するが、これが最終処分の対象となる」

焼却過程で生じた焼却灰は最終処分場へ持つていつて処分することになるが、厳密に言えば、焼却の過程でかなりの量が気体や浮遊ばいじんとなって大気中へ放出される。これは形を変えた廃棄物の環境への投棄にほかならない。

このように、廃棄物は再資源化分を除いて、最終的に埋め立て処分されることになるのだ。埋め立て地の立地地点は海面、水面、平地、山間部とさまざまであるが、山間部が殆どで、他に比べ、圧倒的に多い。

産業廃棄物の最終処分場（埋め立て）には、処理処分する廃棄物の種類に対応してそれぞれに適した施設の構造や設備の設置が義務づけられている。これには安定型最終処分場、管理型最終処分場、遮断型最終処分場の三つのタイプがある。

安定型最終処分場は、そのまま埋め立て処分しても、環境保全上、問題のない廃棄物の埋め立て用である。廃プラスチック類、ゴムくず、金属くず、ガラス・陶磁器くずなどが対象だが、埋め立て地には遮水装置も水処理施設も必要なく、最終処分場といっても殆ど素掘りの穴のようなものである。だが安定型最終処分場にはこれに反する有害廃棄物の違法投棄が多い。

管理型最終処分場は特定有害産業廃棄物に該当しない特別管理産業廃棄

物用の最終処分場である。この処分場には遮水性のある材料で被覆し、埋め立て部分からの排水が外部へ漏れないように保有水等の集排水設備を施し、浸出水処理施設を設置することが義務付けられている。これに該当する廃棄物は、廃油、紙くず、木くず、繊維くず、動物の糞尿、無害な焼却灰・汚泥などである。

遮断型最終処分場は、特別管理産業廃棄物のうちの特に有害とされる特定有害産業廃棄物である。外周を厚さ三五センチメートル以上の鉄筋コンクリートで仕切るうえに、耐水性耐食性のある材料で被覆するほか、外部および内部に仕切り施設を作り、覆いをするなどが義務付けられている。

このような構造で厳重な管理を要する処分場であり、有害な焼却灰、ばいじん・汚泥、鉍滓など有害な産業廃棄物を埋め立て処分する。

「家庭から出る一般廃棄物の焼却灰や不燃物も埋め立て処分されているのよね」

「同じ廃棄物だが、両者は別物だ。産業廃棄物は量が圧倒的に多いし、質も悪い。さらに、有害なのが多い。それゆえ、それらを区別して処分することになっているのだが、なかなか守られず、違法な処分や問題が多い」

「これまで爆破してきた焼却炉は……」

「産業廃棄物のものだね。それも規制対象外のものが殆どだ」

「規制対象外というのは……」

「法律では、一定の規模以下の小規模な処理施設は許可手続きを必要としない。いわゆる『規制の裾切り』というものだね。たとえば、木くず、紙くず、繊維くずといったものの焼却には、一日五トン以下の焼却炉なら無許可で設置できる。全くの規制対象外なんだ」

「これまで爆破してきたのは、その種の焼却炉だったのね。その焼却炉で

他の廃棄物を違法に焼却することもあるということですか」

「そういうことは大いにあるだろう……」

「なぜ、取り締まらないのですか」

「数が多いし、規制対象外の焼却炉なので、なかなか立ち入り検査がしにくいというか、行政も当たらず障らずといった状況なのかな」

「かといって、野放し状態じゃ、ダイオキシン汚染が広がるばかりよ。放置しておくなんて、なんとかしなくちゃ……」

「だから、爆破をつづけるわけ……」

「そう。誰かが代わりにお灸を据えてやらなければならぬのよ」

「そうかもしれないけれど、そんなのがゴマンとあるんだ。全部にお灸を据えることができればいいが、そうもいくまい。それに焼却炉を爆破された連中は黙ってしまい。警察も動き出すだろう」

「違法行為を繰り返している連中に警察が手をかすことはないでしょ」

木実子は森野の心配が分からないわけではなかった。だが危険を避けるためという理由だけで、攻撃のターゲットを山間部の産業廃棄物最終処分場に変える気はさらさらなかった。

彼女には都市を取り巻くように都市近郊に散在する産廃処理場こそ問題なのだ。これらが無許可の規制なしの施設であるうえ、違法な焼却を繰り返しているのであればなおのことである。人口稠密な地帯の周辺にこのような施設が放置されていることは許しがたいことだった。

「そうかもしれないが、かといつて、警察はそれみよがしに焼却炉爆破犯を見逃すようなことはしまい。すでに器物損壊で捜査を開始しているにちがいない。昨夜のことがあったから、いづれわれわれは指名手配され、いつ捕まっても不思議ではない状況なんだよ」

「……………」

彼女は内心そんなことを恐れていたらなにもできないと思いつつ、口をきつく閉じたまま、燃えるような目をしてじつと森野を見た。

森野はしばらく彼女の目を見ていたが、もう口を開くことはなかった。

9

「ママが危ない」

モニターを見ていた耀が叫ぶ。

道端に停車している森野の車に三台の車が近づいてきた。

急接近したかと思うと、前方に一台の小型トラックが割り込み、停車する。後ろにもう一台の小型トラックが森野の車を挟み込むように接近して止まる。その後ろから車の横に乗用車が滑り込み、森野たちを包囲する。

三人の男が降り、包囲した森野の車のなかをのぞき込む。

「あの男たちは……」

「産廃処理場のひとたちだよ」

耀は言下に応える。

「あ、そう。でも昨夜逃げ出したはずなのにね。あのひとたちはどこまで追ってくるのかしら」

「ねえ、お姉ちゃん……」

心配そうな声だ。耀が大きな目でじつと未佐を見つめている。

「耀ちゃん、ママのところに行ってみようか」

未佐が耀を抱きしめ、耳元で囁く。彼女も森野のことが気になっていた。

だがここから抜け出すにはどうすればいいのか。

アムンが「特別な能力が備わっている」と言っていたことを思い出した。特別な能力とはなにか。それにはどんな力があるのか。それが備わっているとはどういうことか。それを用いるときはどうするのか。

彼女はどんな力か知りたかった。どうすればその力を発揮できるか、方法を尋ねたくとも、まわりには人影がなかった。

未佐はアムンを探した。だがどこにもその姿がなかった。アムンはどこへ行ってしまったのか。

「お姉ちゃん、早く……」

耀がしきりに未佐の手を引っ張る。

「うん……」

未佐は迷った。

彼女は耀に引っ張られるままに歩き出す。だがどこまで行っても靄がたなびく空間だった。

彼女は何度も試みる。走っては思い切つて飛び上がる。だがその度に落下したはずみにふたりは転び、尻餅を付いた。

「耀ちゃん、ダメかな。うまくいかないよ」

「ママが……、お姉ちゃん、もう一度してみようよ」

「耀ちゃん、いいわね。一生懸命走るのよ。そして一緒に、思い切つて飛び上がってみようか」

ふたりは駆け出す。ジャンプした。まえより幾分高く跳んだ。だがそのまま落ちる。高く跳んだ分、腰を激しく打つ。ふたりはしばらく立ち上がれなかった。

どうしてもここから飛び出すことができない。未佐は、耀を抱きかかえ、

痛みを堪えていた。

そのとき、突然、耳元を風が吹き抜けるのを感じた。

振り返ると、アムンの大きな姿があった。

「アムン……」

「ミサ、考えることはない。自分のやりたいことを念じなさい。ただ念じて、翔ぶ。さあ、ヨウの手をとって、念じて翔けるのだ。ヨウはママのところへ行きたいんだらう。そう念じて見てごらん。さあ……」

未佐は耀の手を握る。全力で走り出す。そして翔んだ。

ふたりは宙に舞い上がった。未佐と耀は手を取りあって、天を翔けていく。

眼下には、ふたりに手を振るアムンの姿があった。

第二章

10

「痛い、お前、殴ったな。こいつ」

「おい、何するんだ」

「仕返しだ」

「なにを採めている。早く、ふたりを引きずり出せ」

年嵩の男が若い二人に命じる。

浅黒く薄汚れた顔をした一人の若い男が車のドアの把手に手をかけ、開けにかかる。もう一人は反対のドアを拳でどんと叩く。

「早く、開けろ。さもないと、たたき壊す」

車の中には、木実子と森野が男たちの騒ぎをよそに、素知らぬ顔で話している。

「ママだ。ねえ、お姉ちゃん」

耀が窓から覗く。

ふたりが車の屋根に降り立ったとき、未佐は男の一人を足蹴にしたが、誰も未佐に気付かなかつた。未佐には耀の姿はよく見えるが、他のひとりには見えないのだ。ふたりとも地上に降り立ったときに、透明になっていたのだ。

アムンは地球へ向かうふたりにいくつかの助言を授けた。そのなかのひとつに、地球上では誰にも感づかれないようにすること、そのため、常時透明でいることが望ましいと言っていたからだ。

「痛い、何をする」

未佐と耀は車にへばり付いて、ドアをこじ開けようとしている男の首にロープを掛け、思いきり引張る。

男が仰向けにひっくり返った。ロープが首に食い込み、締めつける。

「苦しい、放せ」

男は首のロープに手を入れ、しきりに緩めようとする。未佐は両手の自由を失った男の身体を回しながら、ロープで男をぐるぐる巻きにしていく。

耀はいつの間にか、大きくなっている。耀も同じように、もう一人の男をぐるぐる巻きにする。

透明の未佐がぐるぐる巻きの男を木実子たちの車の前に停めてある小型トラックの荷台に投げ込む。耀ももう一人の男を軽々と持ち上げ、荷台へ放り込んだ。

耀の姿はない。未佐の姿もない。誰もいないのに、ロープでぐるぐる巻きにされた男たちがぼんぼんと荷台へ飛び込んでいく。

一人残っている年嵩の男が口をぽかんと開け、目を丸くしてトラックのまえに突っ立って動かない。男の目にはぐるぐる巻きの男がひとり立ち上がり、トラックの荷台に飛び込むようにしか見えないのだ。

口をぽかんと開けて棒立して見ていた年嵩の男は、つぎの瞬間、トラックの把手に手を伸ばした。急いでドアを開けると、敏捷に身体を運転席に滑り込ませ、エンジンキーを回す。小型トラックは全速力で走り出した。

未佐と耀が車のなかを覗いている一瞬の出来事だった。未佐は木実子と森野が無事であることを確かめると、後を追おうと、耀を促す。

「ママ、ママ」

耀は車の窓ガラスに顔を付けたまま、なかなか離れようとしめない。

木実子は後部座席で虚ろな目を車窓に向けているが、窓ガラスにへばり付いている耀には全然気付かないふうだった。

森野は木実子と一言二言交わすと、車のエンジンを掛け、走り出す。車はすぐ速度を上げた。全速力で走り去る車が瞬く間に小さくなっていく。

未佐は耀を抱きかかえ、車が視野から消えるまで見送っていた。

11

「耀ちゃん」

未佐は促す。でも耀は立ち尽くしたまま動こうとしない。耀はママを乗せた森野の車が一直線に走る道を猛スピードで遠のいていくのをじつと見送りながら、こころのなかでママは必ず戻ってくると思っていた。

耀は目を凝らして消えた車影がふたたび現れるのを待った。だがいくら待っても、車が戻ってくる気配はなかった。

耀はただひとり残されたような気がした。胸が締めつけられ、息が詰まりそうだった。苦しくてしかたがなかった。じつと我慢していると、胸のなかがあっけぽになって、大きな空洞ができた。耀は暗い空洞のなかを彷徨う。誰もいなかった。

耀は未佐を振り向く。

「耀ちゃん、ママには耀ちゃんが見えないのよ。森野さんにもわたしが見えない。ママは耀ちゃんに気付かなかったの。だから、なにも言わないで行ってしまったのよ」

「……………」

「実は、耀ちゃんとお姉ちゃんはママや森野さんとは別の世界にいるのよ」

「別の世界って……………」

耀は目を丸くした。

「あの夜のこと、おぼえている？ お茶筒爆弾を抱えて、お家の近くの産廃処理場を襲撃した夜のことよ。耀ちゃんがお茶筒を焼却炉へ向かって投げたよね。でもうまくいかなかった。焼却炉のまえに落ちたお茶筒を拾おうとしたでしょ。そのとき焼却炉が爆発した……………」

未佐は耀の目を覗き込む。焼却炉爆発の瞬間がまざまざと蘇ったのか、彼女は顔をしかめた。彼女が焼却炉へ投げ入れたダイナマイトが爆発したのだ。

「うん……………」

耀の目が動いた。

「思い出したのね。そのときに……………」

「ぼくとお姉ちゃんは別の世界へ行った……………。そうだね。それでどうしたらそこから出られるの……………」

耀はまだ自分が死んだことに気付いていなかった。ただママとは別の世界にいるだけだと思った。

「それはとても難しいことなの」

「どう難しいの。どうしてママは急いで行ってしまったの」

耀の目に悲しみが溢れた。

「それはね……………」

未佐は乗り捨てられたままの乗用車と小型トラックに目を向ける。

「うん」

耀は目を輝かす。

「それはね、男たちがきつと戻ってくると思ったからだわ。ふたたび襲われるまえに逃げたかったのよ」

突然、大型の乗用車が猛スピードで近づいてきた。後ろに大きなダンプカーが付いている。

「耀ちゃん、危ない」

未佐は耀を道端に寄せる。

車はふたりのまえで急停車する。ダンプカーもつづく。車のドアが開き、男たちが降り立つ。

「どこだ。どこででやられたんだ」

「そこです」

「男と女がいない。どこへ逃げたんだ」

男たちには目の前にいる未佐も耀も見えない。

「まだ遠くへは行ってしまい。早く探せ」

恰幅のいい太っただぶだぶズボンの大男が命じる。男たちは車に乗り込み、エンジンをふかす。乗用車につづき、乗り捨てられていた乗用車と小型トラックも走り出す。そのあとをダンプカーがゆつくり追っていた。

「耀ちゃん、あのトラックに乗っていこう」

未佐は耀の手を取り、まえを行く小型トラックを追いかける。

「えいつと……」

耀が荷台に飛び上がる。未佐がつづく。

「気をつけて」

トラックは一段とスピードを上げた。車体が揺れ、荷台が飛び跳ねる。

ふたりは荷台の柵にしがみつく。未佐の長い髪がたなびき、耀の顔を擦る。

「お姉ちゃん、この車のひとたちはママを捕まえようとしているの？」

振り切るように去っていった車影が浮かぶ。耀はじつと未佐を見つめた。

「そうよ。だから、耀ちゃんとお姉ちゃんがママたちを助けに行くのよ。しっかり掴まって」

「うん」

ママを乗せた車が急発進したのは追手から逃げるためだったのか。耀は未佐の手を堅く握りしめた。

12

「どこへ行くの。停めて、早く」

木実子が叫んだ。

森野はかまわず、スピードを上げていく。

「停めて……」

彼女は後部座席から身を乗り出して、森野の背を突つつく。

「追いかけてくるぞ、きつと……」

「じゃ、どこかに隠れて……」

「後ろを見て。追いかけてくる車がないか……」

「見えないわ」

スピードが落ちた。前方左に小道らしい奥に藪の茂みが見える。

「あそこへ入るか」

車は左へ大きくカーブを切った。車は大きく揺れて、雑草の茂る小道へ入る。よく見ると、雑草の茂みのなかに轍の跡が残っているが、一面に雑

草が生い茂って、一見したところ、道があるようには見えない。

車はゆっくり進む。森野は走ってきた道路から見えない藪のなかの木陰を選んで、車を停める。

彼は大きく息を吐く。そのまましばらく前方に目を向けていたが、急に睡魔に襲われ、彼はハンドルを握ったままうつ伏せになってしまう。

「車よ」

木実子の叫び声に、森野は飛び起きる。

軽快な疾走音が響く。しばらくして重量感の疾走音が近づく。

ふたりは車から離れて、道端に潜む。

「やはり、さっきの車だわ」

乗用車が二台と小型トラックが二台だ。そのあとに、ダンプカーが一台つづいた。

「戻ってくるまえに、ここを出しましょう」

木実子がしきりに促す。

「うん、でも……」

森野は迷った。ここを出るとしてもどこへ行くというのだ。この車は手配されているにちがいない。のこのこ出ていっただら、検問にひかかってしまうだろう。

「昨夜の産廃処理場へ行きましようよ。いまは誰もいないわ。みんながわたしたちを追いかけているにちがいないから」

木実子は目を輝かせた。焼却炉の爆破を考えているのか。不吉な予感が走る。

「そのまえに、ナンバープレートと車体の色を変えておきたいな。街の真ん中を安全に走るためにカモフラージュしておかないと……。多分、この

車はもう手配済みだろうからな」

彼は爆破犯木実子のあとを追うことを決めたときから、このような事態を当然予想していたのだ。彼は車の後ろにまわり、トランクから用意していた新聞紙、カレースプレーや擬装用ナンバープレートといった品々を詰め込んでいる段ボール箱と道具を取り出す。

「フロントと窓を新聞紙で目張りしてくれ。その間にナンバープレートを

変えるから。急いで」

森野はナンバープレートの上に番号の入ったプラスチックを被せていく。

数字が変り、別のナンバーになった。

つぎに、彼はゴールドメタリックのカラーズプレーを取り出し、目張り

の済んだところから塗料を吹きかける。シルバーマタリックの車体が瞬間に変身していく。多少塗り残しがあつたが、一〇分もすると、ゴールドメタリックの新しい車になった。

「まあ、見違えたわ。別の車だわ」

「まあ、遠目には分からないだろう。よし、出かけよう」

トランクに段ボール箱と道具類をしまい込むと、木実子を促し、車を道路に戻す。

「それじゃ、昨夜のつづきをやるか」

なぜか、気分がいやに高揚していた。自分がまるで別人ように感じる。車の色を変え、ナンバーを変えたせいなのか。

森野は急激な気分の変化を訝りながら、ルームミラーの木実子にウィンクを投げ、車のアクセルを強く踏んだ。

「おい、止まれ」

先頭の車の窓から、手が伸びた。制止の合図だ。

後続の乗用車や小型トラックが数珠繋ぎに停車する。未佐と耀が乗った小型トラックも最後尾に着ける。

相次いで、ボタン、ボタンとドアの開閉音が響く。男たちが車から降り、先頭の車の回りに集まっていく。

「麥だ。こんな山奥まで逃げてくるかな。誰か、途中でそれらしい車を見かけなかったか」

「社長、この先に抜け道がありますよ。確か、国道へ出る……」

「国道へ抜けたら、お手上げだ。捕まえるのはむりだな」

男たちはわいわいと勝手なことを言い合う。遠くから、大型車が近づいてくる。

「なんで、ダンプが来るんだよ」

大男は車から降りた。道路の真ん中に立って、しばらく近づいてくるダンプカーを見ていた。

ダンプが止まると、大男は向きを変え、男たちを見回す。

「いいか。もう一度、探すんだ。ダイナマイトを持っているから気をつける。オレは帰る。事務所にいる。捕まえたら連絡してくれ」と言うのと、でっかい身体を窮屈そうに折り曲げ、運転席に押し込む。

小型トラックの荷台で大男の様子を窺っていた未佐と耀は、咄嗟に、社長らしい大男の車の後部座席に乗り移る。

社長は乱暴に車をウターンさせると、もと来た道を引き返す。道の中央

に停車していた後続のダンプカーが急いで道端に寄る。

「おい、お前も帰れ」

ダンプカーの横を通り抜けるとき、社長はウインドーを下げ、大声で叫んだ。

「あそこだったわね」

トタン板で囲まれた産廃処理場が見えてきた。

森野はゲート近くで車を停める。辺りを窺い、ドアを開ける。木実子も車から降りた。手にダイナマイトを握りしめている。

「じゃ、行くわよ」

木実子はゲートの扉を開き、中へ入る。森野は木実子のあとにつづく。

事務所の横を通り抜ける。なかには人影はなかった。廃材などの産業廃棄物や古タイヤが積んであったところには、一面に燃え残った古タイヤや濡れた燃え殻が散らばり、異臭を放っている。奥にある焼却炉も火を落とされているらしい。

「焼却炉に放り込んでおくだけでいいんじゃないか。いずれ、産廃が持ち込まれ、焼却をはじめだろう」

「そうね」

木実子は焼却炉に近づくと、身をかがめ、炉のなかに火種がないことを確かめてから、ダイナマイト筒を奥へ投げ入れる。

彼女は背を伸ばし、大きく息を吐く。それから彼女は森野を振り返る。

「おい、なにしているんだ」

突然、大声がした。

だぶだぶズボンの大男が立っている。すぐ後ろに、棍棒を手にしたもうひとりの男がいた。

森野は大男と向き合う。棍棒をもった男がじりじりと近づき、森野の後ろに回る。森野は木実子を庇い、後ずさりしながらゲートへ向きを変える。

一瞬、棍棒が舞った。森野が倒れた。木実子が逃げ出したが、両手を広げる大男に行く手を阻まれ、取り押さえられてしまう。

森野は意識が朦朧としているのか、首をたれ、ぐったりしている。男は手足をばたつかせて嫌がる木実子をロープで縛り上げていく。

ふたりは両手と両足を縛られ、背中合わせにされたうえ、上半身をロープでぐるぐる巻かれて焼却炉の建物の前に投げ出された。

「炉のなかを調べろ。なにか細工したらしい。気をつける。ダイナマイトが投げ込んであるかもしれない」

大男は携帯電話を耳に当てたまま、事務所へ向かって歩き出す。

「ダイナマイト？ オレはいやだよ。全くしょうがないな。かなわんよ、社長には……」

男はぶつぶつ言いながら焼却炉へ近づき、長い火棒をもっておそるおそる炉のなかを覗く。

「お姉ちゃん、いまだよ」

大男が運転する車の後部座席に乗り込んでいた耀と未佐は、どさくさに紛れて車から降り、大男のあとについてきたのだった。

残された男は焼却炉の扉を開け、炉内に頭を突つ込み、鉄の火棒で燃え殻を掻き混ぜはじめた。社長と呼ばれた大男も事務所のなかに入ったらし

く、姿はなかった。

「待って、耀ちゃん」

未佐は炉内に火種が残っていないかが心配だった。もしダイナマイトが仕掛けてあれば爆発しかねないからだ。

もしかしたら、昨夜の火種が残っているのかもしれない。男もそのことに気付いたのか、急いで炉から離れる。男はぎよきよと辺りを見回している。

突然、男が振り向く。男の動きを追っていた木実子の目と男の目が合った。

「おい、どんな細工をやったんだ。ダイナマイトを投げ込んだのか。お前がやれ。なからダイナマイトを取り出すんだ」

「……………」

木実子は口をもぐもぐさせ、脚をばたつかせる。

「いま、解いてやる。逃げるんじゃないぞ。逃げたら、その男を殺すからな」

男はふたりをぐるぐる巻きにしたロープを解き出す。森野はまだぐったりしている。男は森野を地面にうつちやり、木実子の手と足を縛っているロープを解いていく。

「ほれ、立って、焼却炉のなかからダイナマイトを取り出せ」

「そばに寄らないで」

木実子は男の足を蹴る。

「なにをする、このアマ……」

男は木実子の髪の毛を掴み、焼却炉の前へ引き摺っていき、頭を炉のなかへ押し込んだ。

「分かったわ。それ貸して」

そばに立て掛けてある火棒を指差す。男は「ほれ」と言つて、火棒を目の前に突き出した。

木実子は火棒を受け取り、燃え殻をかき混ぜる。男は四つ這えの木実子の後ろに立つて、炉のなかを覗いている。

男の下腹部がすぐ近くに見えた。木実子は火棒の先を奥に突っ込み、持ち直して勢いよく引いた。火棒が男の下腹部を射った。

「ううむ」

男は短い悲鳴を上げて、仰け反った。

木実子は急いで森野の手と足のロープを解く。そのロープで男の両手両足を縛っていく。そして男の口にハンカチを押し込んだ。

「さあ、早く」

木実子は急ぎ立てる。森野はしばらくきよとんとして辺りを見ていたが、地面に手を付き立ち上がると、木実子のあとを追う。

15

「まだよ」

未佐はいまにも飛びかかつていきそうな耀を必死で抑えていた。

産廃処理場で大男と助手席の男が車を下りるのをまつて、車から脱出してあとを追った未佐と耀は焼却炉の近くで木実子と森野が捕まり、ロープで縛り上げられた一部始終を間近で見ていたのだった。

突然男が木実子に近づき、縛っているロープを解き出す。

「どうしたのかな……、お姉ちゃん」

耀が振り向き、未佐を見た。

男は木実子を焼却炉に連れていく。木実子は指図に従っているふうだったが、突如、反撃に出、一撃を加える。一瞬の出来事だった。

木実子と森野の姿が扉の外に消えると、小走りて去っていく木実子を悲しそうな目をしてじつと見ていた耀の手を引き、未佐は焼却炉のそばに近づいていく。

木実子に急所を一撃された男は焼却炉の前で伸びている。

「耀ちゃん、どうしようか」

未佐にはこの男から聞き出したいことがあった。だが半ば放心状態の耀が気がかりだった。二度も木実子が目の前にいる耀に気付かず去つていったのだ。

「煙突にでもぶら下げておけば……」

耀はぶつきらぼうに言う。なんとか気を引こうと問い掛けたものの、二度目も無視された耀には効果がなかったらしい。

「じゃ、そうしようか。耀ちゃん、手伝つて……」

未佐は煙突に吊るすなんてまるで燻製人間をつくるようで気が進まなかったが、ここは一先ず、耀の言う通りにして反応を見てみようと思つただ。

耀は一瞬きよとんととして未佐をじつと見ていたが、徐に身体を動かし、男のそばにおさるおさる寄つて来る。

「このひと、寝ているの。どうして起きないの」

「ママに急所を一撃されて、気絶しているらしいわね。もうじき目を覚ますでしょ」

「急所って、なに。ママはどこを打ったの」

「ここかな」

未佐は男の下腹部を指す。

「ここ？」

耀は男のズボンのバンドを弛め、パンツを下げる。真っ黒の陰毛が密集している陰部が剥き出しになった。

耀がじつと見ている。

股間にぶら下がるふたつの睾丸のひとつがアヒルの卵大に腫れている。

「ううむ」

男が呻いた。意識が戻ってきたのか。

耀は驚きて、ぴよこんと飛び退く。

「耀ちゃん、煙突に吊るすんでしょ。パンツをもとに戻して」

耀は顔を赤らめ、急いでパンツを引き上げる。未佐も見ではならないものを見てしまったような気がした。男に手をかける気もなくなった。

「どうやるの」

耀はやる気らしい。

「男をロープで結わえて、そのロープを煙突の先端に掛けて引き上げれば……」

未佐は離れたところから指示する。耀が顔を赤くして懸命に男をロープで結わえていく。彼女は遠くから見守っていた。冷静であるためには、彼女にはなにかの距離が必要だったのだ。

陰毛に覆われた男の陰部が目に見えぬ。大人の男の陰部を見た耀はいろいろなことを言い出すにちがいない。彼女は混乱した頭のなかを一刻も早く整理しておかなければと思った。

「おい……」

男が目を覚ましたらしい。口のなかのハンカチで話すことができない。

耀はかまわず、男を吊り上げる。男は足をばたつかせて抵抗する。抵抗はなんらの効果もなかった。

異様を察したのか、事務所から出てきた大男が足早に近づく。

「おい、お前、どうした」

焼却炉の前まで来ると、大男は煙突に吊るされた男を唾然として見上げた。辺りを見回す。人影はない。大男はもう一度煙突の男に目をやる。

そのとき、ロープが飛んできて、首に巻き付いた。上半身から下半身へとロープが巻き付いていく。ぐるぐる巻きにされ、まるで「ミノムシ」

(蓑虫) 状になった大男が煙突を上っていく。

男と並んだところで、未佐は耀にロープの端を渡し、焼却炉の扉の把手に括りつけらす。

二匹の「ミノムシ」がゆらゆらりと揺れた。

ダンプカーがゲートから入ってきた。木実子と森野を掴まえて出ていたものが戻って来たらしい。事務所前で停車すると、若い男の運転手が車から勢いよく飛び降りた。

事務所に駆け込む。

煙突の大男が大声をあげる。

若い男が事務所から顔を出した。

煙突の大男がふたたび大声をあげた。

若い男が焼却炉に走りよる。

「社長、どうしたつす」

「早く、下ろせ」

「誰だ。邪魔するな」

「どうした……」

「どうしても、これ以上近寄れない……」

「じゃ、事務所へ戻って、支部に電話し、応援を呼べ。警察には電話するな」

若い男は事務所へ向かって走り出した。

未佐は耀の手を取り、追い掛ける。

若い男は事務所に入るなり、受話器を鷲掴みする。

「なにをする」

若い男の首にロープが巻き付く。椅子に座らせ、椅子に若い男を巻き付けていく。

「どこへ電話しようとした」

未佐は声色を変える。

「誰だ、お前は……、どこにいるんだ……」

若い男はどこから声があったのか、しきりに辺りを見回す。

「誰でもいい。答えなさい。早くしなさい」

「……………」

「支部とはなんですか」

「支部は支部だよ。ここの支店みたいなものだ。産廃処理場のチェーンだな」

「小規模産廃処理場がいくつもあるということ……」

「そうだ。オレもひとつを任されている」

「どうして全部合わせて大きいのにしないのか」

「バカだね、お前さんは……」

「どうして」

「大きいのをつくれば、法規制に引っ掛かる。ダイオキシンの排出濃度がどうのこうのとうるさいんだ。国や県、市町村の連中がいろいろ口を出し、黙っていない」

「小規模焼却炉には規制がないということか。規制逃れに、無数の支部をつくるというわけか。それは明らかに脱法行為ではないか」

「知るか」

「法に違反する行為だ」

「法律が認めている」

「法の趣旨に反する」

「そんなことを言っていたら、生きて行けない」

「それは明らかに不法行為よ」

「これはほんの序の口だ」

「そこまでやって金を儲けたいの」

「いいことを教えてやろうか。ある筋が規制外の小規模焼却施設を多数つくれと言って、金を出しているという話だ。日本経済のためだつてさ」

「まさか。そんなことまでして国際競争力を高めて輸出を増やしたとしても、国土がダイオキシン塗れとなって国民の健康を損ねては元も子もないではないか……」

「あまい。金持ちはそのんことを一切気にしない。気にしていたら、金儲けなどできない」

若い男は分かかっていつているのか、それとも洗脳されているのか、小生意気なことをいう。

「まあ……」

「この種のことは産廃処理に限ったことではない。他にもまだまだある。ゴマンとあるだろう」

「ふん……」

未佐は思わず、こころのなかで「やはりそうだったのか」と呟く。国や国民を売ってまで金が欲しいのか。うすうす感じていたこととは言え、若い男にこうもあからさまに言われてしまうとは。

こころ穏やかでなかった。国土を食い物にし、国民をも食う化け物をどくすればいいのか。得体のしれない巨大な化け物が目の前に立ちはだかっているのだ。彼女はあらためてアムンを思い浮かべ、耀の幼い顔をまじまじと見つめる。

「ロープを解いてくれ」

若い男が喚く。

未佐は社長の机に近づき、開いたままになっているパソコンを覗く。支部と称する産廃処理場のネットワークと各産廃処理場における産廃の搬入量や処理状況などが表示されていた。

「この近郊の産廃処理場はすべてこの支部なのか」

「まあね。うちのチェーン産廃処理場だ」

「いくつある……」

「百を超えるだろう」

「おお、全部で一三五もあるのか」

未佐は机のうえに投げ出してある名簿を捲る。若い男が電話しようとして取り出したものだった。

辺りにある小規模産廃処理場のすべてがチェーン組織で、一三五もの小規模産廃処理場が一体として運営されているのか。こうして巨大な大規模

産廃処理場で処理する量を超える産廃がなんらの規制なしに焼却処理できることになるのだ。こんなことが許されているのか。

木実子の顔が浮かんだ。小規模焼却炉にダイナマイトを投げ込む木実子は、小規模産廃処理場の全部を敵にまわして戦うことになるのか。このままでは木実子と森野はまた捕まってしまう。

「耀ちゃん、ママたちを探そう」

未佐は耀を促し、事務所を出た。突然急ぎだした未佐を怪訝な顔をして見る耀を急ぎ立て、ゲートをめざす。

ゲートをすり抜け、外へ出ようとしたとき、車の近づく音がした。乗用車一台のあとに、小型トラックが二台つづいた。まるで競走でもしているように勢いよくゲートから入り、勝手な場所にばらばらに急停車する。車から男たちが飛び出した。

未佐と耀は男たちの横をすり抜け、ゲートから外へ出ていった。

16

「ここから早く離れよう。追手が来ないうちに」

道路の両側には木立が連なり、一面に雑木林が広がっていた。

「いいわ。でも、ここはどこかしら。途中に産廃処理場がありそうね。行き掛けの駄賃に、もう二、三カ所にダイナマイトを仕掛けていきたいわ」

森野は返事せずに、アクセルを踏む。車はスピードを上げていく。「立派な道路ね。でもそんなにスピードを上げなくても……」

木実子の声が聞こえないのか、車は一目散に走りつづける。

道路から少し奥まったところにトタン張りの塀が見えてきた。あれも産廃処理場か。一キロも走らないのに、これで二つ目だった。

前から幌をかけた大型のトラックが近づいて来る。目の前で左折した。トタン張りの塀のなかに入っていく。

「この辺には小さな産廃処理場が密集しているみたい」
車窓から外を見ている木実子が呟く。

たしか、バッグのなかにはダイナマイト筒がまだ数本残っているはずだ。これらを全部仕掛けてから、遠くへ行こう。

木実子は目を凝らし、ターゲットを探す。

道路から奥まったところの産廃処理場は避けたほうがいい。やはり、専用の道を通らなければゲートに近づけないのは、危険が多い。こんど捕まれば、もう逃げ帰ることができないだろう。なんとなく、そんな予感があった。

「あそこの塀のところで止めて……」

前方に塀が見える。道路際にトタンの塀が延々と連なっていた。

木実子は胸の高鳴りを覚えた。布製のバッグをたぐり寄せ、うえからダイナマイト筒の感触を確かめる。

車は減速をはじめめる。塀のそばで止まりかけると、つぎの瞬間、車は加速して走り出した。

「どうしたの」

木実子の怒気を含んだ声が響く。

「後ろ……」

森野が叫ぶ。

反射的に、木実子が振り向く。一台の車が猛スピードで近づいている。

見覚えのある黒い乗用車だった。不意に現れ、横付けしてきた追手の車にちがいない。

産廃処理場から命からがら逃れて走り回り、道路端に駐車して一夜を過ごしていったときのことだった。

「気が付いているのかしら。この車は色もナンバーも変えたはずでしょ……」

車体の色はシルバーからゴールドに変っているし、ナンバープレートの数字も前とは別のものだ。

森野はスピードを上げる。だが敵からあまり離れない距離を保つ。急いでいるのか、後続車と微妙な距離を保って走る。

フロントガラス越しに運転している男の顔が見えた。携帯電話を耳に当て、片手運転だ。ダイナマイト犯の車を発見したと報告しているのか、それとも仲間と単なる仕事の話か。

森野は反対車線に車を移動した。後ろの車も反対車線に移った。

「やばいぞ。やつは感付いているみたいだ」

森野は車を元の車線に戻す。後ろの車も戻る。

車のスピードを上げる。後ろもスピードアップした。

前から小型トラックが近づいて来る。

「しっかり把っ手を握って。大きく揺れるから、シートベルトも押さえるんだ」

小型トラックが目の前に近づいたとき、森野はハンドルを右に切って反対車線の小型トラックの前へ車を入れる。小型トラックの運転手の驚愕の顔が迫る。

つぎの瞬間、森野はハンドルを左に切る。車は大きく揺れて元の車線に復帰した。

後ろで大きな音がした。

後ろの車がつられて反対車線に飛び出して、小型トラックと正面衝突したらしい。

森野はアクセルをさらに踏む。

追手の車影が消えていた。

森野はスピードを落とす。

前方にまたトタン塀が見えた。道路際から少し奥に入っているようだ。

ゲートへの横道をゆっくり通り過ぎていく。

木実子とはときどき振り向き、後方のチェックをつづける。

後ろにつづく車はなかった。遠くで救急車のサイレンがした。

森野は時折アクセルを踏み、ほどよくスピードを上げるが、産廃処理場らしいトタン塀を見つけると、スピードを落とす。

車はなお走りつづける。

17

未佐はつぎつぎと産廃処理場の焼却炉にダイナマイトを仕掛ける木実子を思い浮かべる。なぜ、木実子はこれほどまで執拗に産廃処理用小型焼却炉の爆破をつづけるのだろうか。

社会の大きなうねりのなかで、小型焼却炉のひとつやふたつにダイナマイトを仕掛けたところでどうなるというのだ。それでなにが変わるとい

のか。

ゴマンとある焼却炉のひとつやふたつを爆破して、なにを起こそうというのか。大きなうねりに細波さえ立つことはないだろう。そして拳げ句の果てに、捕らえられ、警察に突き出されるか、リンチの末になぶり殺されるかだ。

「命と引き換えに焼却炉をひとつ爆破したところで、排出されるダイオキシン全体ではどうということもないのに……」

「ママはそうしたいだけなんだ、きつと」

未佐の呟きに、耀はそっぽを向いたままだ。

「そうか。そうだったのか」

耀の言う通りだった。傍から見れば、ダイオキシンの排出量を減らすために、命がけで小型焼却炉を爆破しようとするなんて、全く馬鹿げたこととしか見えない。未佐にもそうとしか見えなかった。そしてそれに一体どんな意味があるのかと問いつづけていたのだった。

だが耀の一言で、未佐は自分が勘違いしていたことを気付かされた。いまままで客観的に見ることが唯一妥当なこととしか考えていなかったのだ。

何度も捕まり、そのたびに命からがら逃げ出しながら、また挑戦する。

彼女はいま、木実子のこんな馬鹿げた行為に、命をかけてもダイオキシンの排出量を減らしたいという強い意思を感じ取ったのだった。

「耀ちゃん、さあ、行こう」

「どこへ……」

「ダイオキシンを出している焼却炉を打つ潰そう」

「ママたちのように……」

「そうよ。でもひとつやふたつの焼却炉じゃないわよ。差し当たり、この

近くにある野放し状態の二三五のゴミ焼却炉全部をぶっ飛ばそうじゃないの」

未佐は産廃処理場の事務所から持ち出したチェーン組織だという産廃処理場支部のリストを拡げる。

「ダイナマイトあるの」

「あ、そうか。この計画を遂行するには大量のダイナマイトが必要か」

「お姉ちゃん、ダメだよ。ダイナマイトがなければ」

「じゃ、産廃処理場の人たちを吊るし上げることにするか。ほら、さっきのときのように、焼却炉の煙突に……」

「それだったら、ダイナマイトがなくてもできる」

耀は一人前の口をきく。

「そうねえ。じゃ、計画を立てなくちゃ」

未佐は耀の顔を見て、にんまりする。

いつの間にか、耀も成長したものと思う。だがひとつ気がかりがあった。

耀が男の股間にあるふたつの睾丸を見てしまったことだ。大きな睾丸を見て、耀がどう感じたか、知りたかった。とはいっても、怖くて尋ねてみることはできなかった。

未佐は耀の様子をそれとなく窺いながら、産廃処理場の事務所から持ち出した二三五ある産廃処理場のリストを眺める。二三五の産廃処理場をどの順序で攻めていくか。どのような方法で攻めるのがいいか。

未佐は二三五の産廃処理場で終わりとは思っていないかった。産廃処理場からのダイオキシン排出量を全国レベルで徹底的に削減するには、日本全国に分布する産廃処理場を対象にしなければ意味がないのだ。

ただ、全国でも有数の小規模産廃処理場密集地帯での確実かつ徹底的な

攻撃を見て、他の地域の産廃処理処分業者が自主的に廃業することがあるかもしれない。未佐はこのことを期待していたのだった。

ひとり残さず、煙突に吊るすのだ。産廃の悪臭の満ちたダイオキシン煙を浴び、自分がやっていると自分の身体で知るのだ。

攻撃の失敗は許されない。それだけに、計画を念入り作成するつもりだった。

未佐は何度もリストを眺め、産廃処理場の全体的位置関係を調べる。全国の産廃処理場業者に衝撃を与えるには、ひとつの産廃処理場をも漏らさず、ほぼ同時に攻撃を行うことだ。さらに衝撃を倍加するために、それぞれの産廃処理場を代表者か作業責任者がいる時間を狙うのだ。

だが二三五もの産廃処理場が対象だ。ひとつも欠けることなく、代表者か作業責任者がすべてに揃うようなことはありうるのか。そんなことは滅多にないのではないか。彼女は心配だった。

リストをもう一度はじめから見た。いままで気が付かなかったが、最後のページの終わりのところに奇妙な数字がいくつか載っている。これらはなにか。もしかしたら、なにかの合図を表わす暗号ではないのか。

そのとき、彼女の頭にひとつのアイデアが閃いた。このアイデアを使えば、各産廃処理場の責任者が職場を離れることができず、決して留守することはないだろう。

彼女は勝ち誇ったような気分です、閃いたアイデアで計画を練り上げる。われながらよくできたと思う。だがあまりによくできたせい、どことなく違和感があった。そのせい、なんとなくこの計画に大きな落とし穴があるような気がしてならなかった。

いつもの彼女なら、ここで立ち止まって考えるのだが、なぜか彼女はた

だ前へ進むことしか考えていなかった。

18

「なに、事故……」

社長と呼ばれている大男は携帯電話を耳にしたまま、信じられないといったふうに、あらぬ方を見てしばらく突っ立っていた。

爆破犯であるダイナマイト女の追跡中の事故だった。前方から接近する小型トラックと追跡していた車が正面衝突したのだ。小型トラックを運転していた中年の男は衝突の衝撃で外へ投げ出され、重傷を負った。乗用車を運転していた若い男は即死だった。

大男は若い男に煙突に吊らされたまま追跡を命じたことを思い出した。脳裏に立て続けに起きたこれまでの出来事が去来した。

ダイナマイト女を捕まえたのにまんまと逃げられてしまったことから自分ぐるぐる巻にされて煙突に吊るされたことまで、めまぐるしく鮮明に脳裏に浮かんで消えていった。

「人間燻製か……」

彼は忌忌しそくに吐き捨てる。不意に、怒りが突いて出た。だが妙に引つ掛かるものがあつた。

ロープでぐるぐる巻きにされたときを思い浮かべる。まるでロープが蛇のようにすると動いて独りでに身体に巻き付いてきたのだ。彼は思い出してはそのたびに身を震わす。

「おい、お前はとうだった……」

一緒に煙突に吊らされた男に声をかける。

「いつの間にか……、気付いたときには吊るされていた」

まだ下腹部が痛むのか、股を拡げ、ぎこちない歩きかたをする。

大男はちらつと横目を流し、つばを吐く。大男はひとり、大股で事務所に戻った。

事務所のなかは乱雑に散らかっていた。椅子は倒れ、電話の受話器が投げ出されたままだった。書類が机の上に散らばり、床に落ちているものもあつた。

「おい、誰かいないのか」

閑散として、返事がない。

大男は机の椅子に腰をかけ、受話器を電話器に戻しながら、室内を見回す。誰もいなのに、人の気配がするような気がする。

ドアが開いて、ひとりの男が入ってきた。

「なんだ、お前か」

煙突に吊らされていた男だった。

「他のやつらはどこへ行ったんだ」

大男は突っ立ったままでいる男にあたる。

そこへどやどやと男たちが戻ってきた。

「どこへ行ってたんだ。留守にしやがって……。テツが死んだ。事故だ。ツキ、お前、現場へ行って見てきてくれ」

大男はひとりの男に命じる。

「名簿はどこにあるんだ」

男を見送ると、大男は受話器の手を伸ばす。

「社長、名簿が……、実は、みんなで名簿を探していたんです」

「なんだと……」

「名簿が誰かに持っていかれたようなので、それを取り戻そうと……」

椅子に座らされてロープでぐるぐる巻にされた若い男だ。

「誰が持っていったのだ」

「誰か分からないけど、名簿が飛んでいくように宙を舞って事務所の外へ出ていったので……」

「名簿がひとりで飛んでいったのか……、バカなことを言うな」

「名簿が事務所の外へ……」

若い男は信じられないというような目をしながら、繰り返す。未佐が名簿を取り上げるのを若い男が見ていたのだ。

若い男には透明な未佐の姿は見えないが、手に持った名簿だけが見えらしい。それはまるで名簿がひとりで動きだしたように見えるにちがいない。彼女はまだ手に持った物体までは透明にすることができなかったのだ。

「大の男が三人して飛んでいった名簿を追いかけていたというのか。バカバカしい。その話はもういい。いいか……」

大男は強制的に話題を変える。

そして各支部責任者宛てに、焼却炉にダイナマイトが仕掛けられているおそれがあるので徹底的なチェックと厳重な警戒をすること、これと併せて、搬入される産業廃棄物を目一杯受け入れ、廃棄物を処理せずに焼却炉脇に積み上げておくようにと命じる。

若い男ともうひとりの男は出ていった。

二人の後姿を見送りながら、大男は男たちが命令を伝えるために各支部へ出向いたものの、果たしてうまく伝わるか危ぶんでいた。

大体、名簿が飛んでいったなどと本気で言うやつらだ。着いたさきの支部（傘下の産廃処理場）でどんなことを言い出すか分からない。また名簿がひとりで飛んでいったから支部まわりをさせられているなどと言いつつ、誰も彼らの話を信用しないことだろう。命令もいい加減にあしらわれてしまうことになるかもしれない。

もしそんなことになったら、焼却炉のチェックも十分なされず、ダイナマイト爆発による犠牲者を出すことになるにちがいない。

大男はもう一度机の周りを探す。やはり名簿はなかった。大男はひとりソファに座って、危惧が危惧で終わることを祈った。

だが気掛かりは収まらなかった。胸の内がなにやらざわついて落ち着かない。自分で電話したほうがいいと思い、ふたたび名簿を探すが見当たらない。

だしぬけに、名簿が飛んでいく情景が浮かんだ。名簿が事務所のドアを開け、外へ出ていく。

「お、お……」

一瞬、ロープが身体に絡み付くような感じがした。身体中に薄気味悪い感触が走る。大男は両方の掌で腹部から背中へ掌を回していった。ロープらしいものはなかった。

彼は、もしかしたら、名簿が飛んでいったというのは本当だったのかと思った。ロープといい、不思議なことがつづく。なにかが変だ。

大男はようやく異変に気付いた。

異変はダイナマイト女が現れてからだ。これからも異変がつづくのか。もつと大きな異変が起るのか。

大男はじつと身構える。だがなにに対してどう身構えればいいのか、皆

目見当がつかなかった。

19

「ここで待っていて。預けていたものを取ってくるから」

「じゃ、ガソリンを入れて来る」

「この辺で待っているわ」

森野は木実子を私鉄の駅前で降ろすと、ロータリーを回って大通りに出る。見知らぬところで注油するのは気が進まなかったが、メーターにはすでに空の表示が出ていた。彼は人目の付く駅前を避け、すこし離れたところにあるガソリンスタンドに車を入れる。できたらセルフサービスにしたかったが、ここはそうでなかった。

「いらしゃいませ」

揃いの作業服を着た若い男たちが帽子を脱いで誘導する。

「満タンで頼むよ。レギュラーでね」

彼は車から出て、濡れタオルを借りて、フロントガラスを拭く。高校生のアルバイトらしい男の子が寄ってきてウインドーガラスを拭いた。

「なにか、ゴムの焼けたような臭いがするけど……」

彼は手を休め、男の子に話かける。

「ゴムの……。ああ、まだ臭いますか。大量の産業廃棄物が燃えたそうです」

「産業廃棄物……。この辺に産廃処理場でもあるの」

彼はしらっばくられて聞き返す。

「一寸奥へ入ると、産廃処理場だらけで、しょっちゅう火事騒ぎを起こしていますよ。わざとやっているのじゃないかという噂ですよ」

「そお、古タイヤもわざと燃やすのかね」

「なんでも、ダイナマイトを投げ込まれたといつて大騒ぎしているとか……」

「そお、でも近くに産廃処理場がこう多くては街の人びとも嫌だろうな」

「ええ……」

彼は男の子にタオルを返し、事務所のカウンターで支払いを済ませた。

「ダイナマイトのせいにしたか」

彼は口のなかで呟きながら、ハンドルを切り、ゆっくり駅前のロータリーに入っていく。

道路端で木実子が手をあげて合図した。ミカン箱大の段ボール箱を大事そうに抱えている。

目の前に車を止める。木実子はドアを開けて後部座席に段ボール箱を放り込むと、急いでまえに回って助手席に乗り込む。

彼は黙って見ていた。聞くまでもなく、彼には段ボール箱の中身がダイ

ナマイトであることは分かっていた。

木実子かシートベルトの手をかけると、すぐ車が動き出した。森野はアクセルを踏みながら、一刻も早く、この街を出たいと思った。

第三章

20

私が小規模産廃処理場（小型焼却炉）をターゲットにする理由

ーダイオキシンの大気への排出量を減らすことがなぜ重要なのか、そして小規模産廃処理場の燃焼施設がなぜ問題なのかー

ダイオキシンと一般に呼んでいるのは、ポリ塩化ジベンゾパラジオキシン（PCDD）とポリ塩化ジベンゾフラン（PCDF）である。それに、ダイオキシンにはいわゆる異性体（ダイオキシンでは塩素数と置換位置の違いによる）が、PCDDには七五種、PCDFには一三五種、計二一〇種もある。これらがダイオキシンが含まれていることを考えれば、ダイオキシン類と呼ぶほうが正確である。それにもかかわらず、ここでは一般にならつて、単に、ダイオキシンという。

ダイオキシンは強い毒性をもつ。二一〇種あるダイオキシンのうちで、最も毒性が強いのが二、三、七、八―テトラクロロジベンゾジオキシン（TCDD）である。これの急性毒性は青酸カリの一〇〇〇倍もあるという。このほかに、発癌性、生殖毒性、免疫毒性、内分泌障害（環境ホルモン）などがある。

では、ダイオキシンはどのようなルートで人間の体内へ取り込まれるのか。実は、大気中のダイオキシンが呼吸などで吸い込まれるごくわずかで、ダイオキシンの大半は人間が摂取する食物を通して体内へ取り込まれる。

それなのになぜ、ダイオキシンの大気へ排出量を減らそうとするのか。

それは大気へ排出されたダイオキシンが植物（たとえばホレンソウなどの人間の食用野菜類や野生の植物）に直接沈着したり、または田や畑などの土の表面や河川湖沼などの水域に降下して土壌や水を汚染するからである。

土壌や水域が汚染されれば、そこに棲息する動植物に取り込まれ、食物連鎖を通して濃縮されていく。その結果、人間が食べるものが高濃度のダイオキシンに汚染されてしまうことになるのだ。

このように、大気中へ吐き出されたダイオキシンは回りまわって人間の食物を高濃度に汚染していくが、ではダイオキシンを発生させるもの、すなわち発生源にはどのようなものがあるか。

これには生産過程などにおける化学反応から生じるもの、ものの燃焼から生じるもの、その他汚染土壌によるいわば二次的な発生源からのもの、の三つがある。日本では二番目の燃焼から生成されるものが一番多い。たとえば、都市ゴミ焼却、産業廃棄物焼却（有害廃棄物焼却や医療廃棄物焼却を含む）、金属精錬、下水汚泥焼却などからのものである。

なお、一番目の化学反応からのものも少なくないと思うが、これについては、いずれ触れる機会があるだろう。

以下、燃焼から生じるダイオキシンを中心に話をすすめよう。

いろいろな燃焼過程でダイオキシンが生成されるので、これらのダイオキシン排出量を削減するためには、燃焼過程における対策が不可欠である。たとえば、燃焼改善や排ガス処理といったものだ。

だがすべての燃焼施設で対策がなされるとは限らない。

法規制の対象となつている大規模燃焼施設では最新の対策が施されても、規制の対象からはずれる小規模燃焼施設ではまず対策がなされることがない。小型焼却炉や野焼きが野放し状態なのだ。

法規制の不備を指摘したので、ついでに言えば、中央集権構造と国の縦割り行政組織とによる地方自治軽視と縦割り行政がこの種の制度不備問題をさらに制度的組織的に助長している。

いちいち指摘しないが、制度不備を助長するばかりでなく、縦割り組織にもとづく縄張り意識と組織防衛（省益指向本位と硬直した権限と管轄）が新たな問題をつくりだしているところがあるのだ。

ところで、なぜ、小規模焼燃施設が問題かというと、法規制がなく野放し状態にあるからばかりでなく、ここで多用されている小型焼却炉そのものに問題があるのだ。

一般ゴミや産業廃棄物を燃やすと、その燃焼過程でなんら意図しないのにダイオキシンの生成されるが、ダイオキシンの生成メカニズムは結構複雑である。一般ゴミや産業廃棄物のなかに塩素や塩素を含む化合物がなければダイオキシンは発生しないが、塩素や塩素化合物があっても燃焼条件によつて発生量を減らすことができる。高温による燃焼や過剰酸素などの燃焼条件下ではダイオキシンの発生が減るのだ。

それゆえ、燃焼過程から発生するダイオキシンを削減するには、一般ゴミや産業廃棄物を焼却する際、まず、高温、過剰酸素などをコントロールしてダイオキシン発生量を減らすための最適な燃焼条件の燃焼管理を施すことだ。それに併せて、これに高性能の排ガス処理施設をつけ、ダイオキシンやその他の大気汚染物質を浄化することだ。

だが小型焼却炉では両方ともできないし、やろうとしない。さらに問題なのは、小型焼却炉では煙突が低く、煙突から吐きだされた煙はなかなか希釈しないのだ。排煙は地面を這い、煙のなかの高濃度ダイオキシンは大気中で薄められることなく、近辺の住民、樹木や農作物を襲い、土壌や水

域を汚染していく。

もちろん、野焼きは論外である。野焼きはさらに酷い。

このように、小型焼却施設（小型焼却炉や野焼き）には問題の多いのに、法規制の対象外ということ、大都市圏とその近郊を中心に無数に点在する。これらの施設は国や地方自治体によつてどこにいくつあるのかさえ十分把握されていない。これらのすべてがいわば野放し状態にあり、日々、高濃度のダイオキシンをまき散らしているのだ。

これが、小型焼却炉をターゲットにしている私の理由である。もちろん、いうまでもないことだが、一般ゴミや産業廃棄物、ことに塩素系廃棄物を減らすことやリサイクルなどもより重要なことである。

21

「ミサは重大なミスを犯した」

アムンは未佐をじつと見ている。彼女はアムンに呼び戻されて、耀とともに「天の基地」に戻ったところだった。

「重大なミスですか……」

未佐は隣の耀に目を走らせる。彼女には「重大なミス」といわれても、全然見当がつかなかった。彼女はアムンの目をじつと覗き込む。

ふたりはアムンの机のまえに立たされ、尋問を受けていたのだ。未佐はアムンの冷徹な視線に耐え、彼女は自分の行動を振り返る。

突然、彼女の脳裏に、産廃処理場の事務所から名簿を持ち出したときのこと浮ぶ。

「そうか。あれがそうだったのか」

彼女はこころのなかで呟く。

「そうだ……」

アムンには相手の胸のうかが分かるのか、間髪を入れず、金属性の甲高い声が彼女を射る。

「……名簿が宙を舞い……、きみたちの行動は、多分、『天の組織』から派遣されたものの仕業と感づかれてしまったにちがいないのだ」

名簿を透明にしなかった（未佐はその方法をまだ習得してなかったのだ）

ために、未佐が消えているのに、手に持っていた名簿だけが残り、まるで名簿が宙を舞うように見えたのだった。

「敵？」

「そうだ。まだ詳しく話していなかったが、実は、日本をターゲットに暗躍する集団が勢力を伸ばしてきているのだ。この『黒の集団』についてはいまもって、組織の全体がつかめないが、これまでの調査で判明していることは……」

アムンは「『黒の集団』」と言っても、彼らが黒い服を纏っているから、わたしがそう名付けただけで、多分、正式の名称ではないだろう」と前置きしてから、「黒の集団」について話した。

先のことは分からないが、彼らは多分古代エジプトからつくづく錬金術の流れを汲むグループの一派で、最近では現代の化学技術を駆使して勢力拡大を図っているらしい。彼らは地上にないものや希少資源（物質）の合成を試み、つぎつぎに新たな化学合成物質を作り出すことに成功してきた。

こうして彼らはわが世の春を迎えたと思つたようだが、化学合成物質の予期しない副作用に悩ませられるようになった。

現代文明のもとで進んだ巨大化高度化大量化の過程で、化学合成物質も大量生産大量消費大量廃棄されてきたが、化学合成物質のもつ予期せぬ副作用も巨大化高度化大量化していった。そしてやがて「黒の集団」の存立をも脅かすものとなり、放置できなくなったのだ。

最初から副作用のない化学合成物質をつくり出せばよかったのに、それができなかった。そのうち、副作用のほうが無視できないほどに巨大化高度化大量化してしまったというわけだ。そこで、彼らは自らのプライドを賭け、副作用退治を試みることになったとのだろう。

だが彼らは直ぐ難問に直面することになる。

新しい化学合成物質をつくり出すことは簡単にできても、副作用をなくすることは簡単ではないのだ。どんな副作用があるのか、何度も調べ、副作用が見つかれば、さらにそのような副作用のない新たな物質を合成することになるが、その度に、莫大な金がかかる。金はなんとかできて、ことのほか難しいのは、他の物質との複合的な副作用だった。

たとえ、副作用ない化学合成物質をつくり出しても、他の化学合成物質と一緒に用いられたりすると別の副作用が現れることがあるのだ。また、殆どゼロに等しい極超低濃度で、単独では殆ど影響のないものでも、他の化学合成物質と合えば、複合して大きな影響（副作用）をおよぼすこともある。

これを徹底的に解明して、この問題を完全に解決しなければ、自分たちがダメージを受け、メンバー各人の生存すら危ぶまれる事態に遭遇する恐れがあった。「黒の集団」としてこれにどう対処すればよいのか。

環境にはさまざまな物質が無数に存在する。環境における化学合成物質の複合影響をクリアするには、環境中の無数の物質との相互関係から生ず

る無数の組み合わせの複合影響をチェックしなければならぬ。だが化学合成物質の複合影響については現代科学のもとでも殆ど手がつけられていない難問だった。

ところで、「黒の集団」が自らの存続を賭けて、この問題への手取り早い取り組み方として採用したのが、人口稠密な日本列島での疫学手法的な生体実験だったのだ。すなわち、日本列島における人間を含む生物生態系へ化学合成物質を直接与え、その影響を調べることによって、当該化学合成物質の人間や生物、あるいは生態系への影響をチェックしようと考えたというわけだ。

これで化学合成物質の複合影響が完全に解明できると思われないが、切羽詰まった彼らにはこれを方便として採用するほかなかったのかもしれない。

こうして「黒の集団」によって、日本人はさまざまな化学合成物質の副作用をチェックするための実験台とされたのだ。

「『黒の集団』は……」

「無国籍の集団で、メンバーには日本人もいるらしい。彼らの目的は定かでないが、古代錬金術師組合の流れを汲む秘密結社のひとつとっていいだろう。彼らは自分たちで開発した新化学合成物質を用い、世界を支配したいと思っているのか、それとも、世界の富を独り占めしたいのか、単に、新化学合成物質の有害性をチェックし、有害な化学合成物質を排除しようとしているのか、不明だ。それに、この種の秘密結社がこのほかにあるのかないのかさえ分からないのだ。もしかしたら、別の秘密結社もあって、この種のものも複数存在するかもしれない。それとも、『黒の集団』は統一されたひとつの巨大結社の末端の一組織かもしれない……」

「……………」

未佐は黙って頷く。

「いま、わたしたちに分かっていることは、日本列島において、司祭のような黒い服を纏った男たちが化学合成物質をあの手この手を使って撒き散らし、性能や複合影響のチェック実験をはじめているということだ。彼らは『天の組織』の存在に気づいているらしく、かなり神経質になっているということだ」

「アムンは一端、話を打ち切り、未佐と耀をじつと見ている。未佐はアムンの目の奥を覗く。アムンの話には腑に落ちないところがあつたのだ。

なぜ、日本列島が実験場になるのか。世界にはほかに実験場がないのか。もし、世界中で日本だけが実験対象となつているとすれば、世界には人種や生活習慣の違うさまざまな人間がいるし、また体格も異なり、健康状態や栄養状態などの違いもあるのに、なぜ、日本人が実験の対象に選ばれたのか。それよりも、産業廃棄物処理用小型焼却炉爆破と「黒の集団」がどう関係するのか、いまいち判然としないのだ。

「名簿が宙を舞っていたことが『黒の集団』に知られたとしても……」

未佐は曖昧な笑みを浮かべ、アムンに疑問を呈する。

「彼らは『天の組織』を知っており、恐れているからだ。この問題にわれわれが関与していると分かれば、彼らも本腰を入れて戦いを挑んでくるにちがいない。これに対して、われわれがどう立ち向かうべきか」

「地球では日本だけが……」

「そう。日本は島国で周りが海に囲まれて孤立しているから、この種の実験場にうつつけなんだな」

「それにしても、多寡が小規模な産廃処理場の焼却炉爆破なのに、なぜ

『黒の集団』が動きだしているのかしら……」

未佐には合点が行かないのだ。

「化学合成物質の影響と問題を一般化して話してきましたが、彼らはターゲットをしぼり込んできているように見受けられるのです。彼らは新たな陰謀を企てているらしい。最近になって、ようやく見えてきたことですがね」

アムンは打ち解けたように、急に調子を落とし、ゆっくり話す。

「……………」

「もしかしたら、彼らは化学合成物質の副作用の利用を思いついたのかも。まあ、副作用を利用することができれば、副作用でなくなるからね」

「そんなことあるのですか。副作用は副作用でしょ。新たな企てがあっても、化学合成物質の副作用チェックはつづけるんですよ」

「そうあつて欲しいが、地球を征服しさえすれば、すべてが思うままにできると考えているのかもしれない……」

「地球征服とは……、彼らが……」

未佐には理解できなかった。事態がそんなふうに急展開しているとは思ってもよらなかった。もし本当なら、いつまでも産廃処理場の小型焼却炉退治にかかわっていることはできない。

「まだ詳しいことは分からない。いずれ分かり次第話すことになるが、第一線に出かけるまえに、十分訓練を受けて二度とミスを犯さないように。手助けが必要なときには、連絡すること。きみたちの暗号名は『白の集団』だ」

アムンの姿が消えた。

未佐は耀の手を握り締めたまま、アムンがすぐ戻ってくると思い、しばらくアムンのいない机のまえに立っていた。

隣の耀がしきりに未佐の手を引く。彼女はアムンが戻らないことによりやく気付き、踵を返した。

22

「残り三本よ」

木実子は鞆のなかを覗き、森野を振り返る。

「うん、これが最後……」

森野は口の中でなにやらもぐもぐ言つて軽く頷くと、車のアクセルを踏む。不吉な予感が頭を過る。彼はかまわずアクセルを踏みつづける。

「ねえ。最後なら、あそこがいいわ」

木実子の鼻にかかった声がした。

「……………」

彼は一瞬怯む。一瞬、彼女の熱く燃えた白い肢体が浮かんでは消えた。

「ねえ……」

「うん」

彼は迷った。やはり昨夜の彼女はいつもの彼女ではなかったのか。彼女も最後のつもりだったのか。

「最初の産廃処理場よ。ほら、捕まってぐるぐる巻にされたところよ」
木実子は前方を見据えたまま、平然と言つて退ける。

「なんで……、また捕まるぞ。もうどこでもいいじゃないか」

彼には彼女が最初の産廃処理場にこだわる気持ちが分からないわけではなかった。だがリスクを犯してまで実行する価値があるのか。自己満足だけでリスクを度外視しているようにしか見えない。なぜか。

「どうしてもあの産廃処理場をやっつけなくちゃ。あの大男がこの辺の産廃処理場の元締めじゃないの」

相変わらず、木実子はまえを見据えたままだ。

「元締め？ なにを根拠にそう決めつけるんだ」

女の直感かと思いつつも、彼は声を荒げる。なにがなんでも自分の思いのまましようとするとか、彼には思えなかった。

「なに言ってるの。あの大男が大勢の自分連れてわたしたちを探しにきたじゃないの。あの子分のひとり別の産廃処理場で見かけたわ。彼が召集をかけたのよ。他の自分たちもきつとそうよ」

「だから、大男がこの辺の元締めだということか」

「どうしてもあの大男をやっつけなくちゃならないのよ」

彼女は大声で宣言するように言う。

「だが……」

こう言つて、彼は口を噤む。

彼は黙って、彼女の横顔を一瞥する。彼女は実行するつもりでいるのだ。もはやなにをいっても彼女を阻止することはできないだろう。

だがリスクが多すぎる。産廃処理場では男たちは彼女を待ち構えているにちがいない。このことは彼女もうすうす感じてはいるはずだ。それが分かっていながら、あえて挑戦しようというのか。まるで自爆テロだ。

産廃処理場の扉が見えてきた。ゲートから遠く離れた雑木林のなかに車を乗り入れる。車輪が乾燥した落ち葉を踏む音がする。

秋の野につるべ落としの夕闇が迫ってきた。もうすぐ暗闇が支配するだろう。

「男たちは嚴重に警戒していると思うわ。仕掛けたら、直ぐ逃げ出さなくちゃ。だから、あなたは車で待っていて」

木実子は車を降りると、瞬く間に闇のなかに消えていった。森野はしばらく彼女が消えた闇を見つめていた。戻る気配がないことを確かめると、おもむろに車のドアを開け、彼女のあとを追って闇のなかへ入っていった。

23

遠くで爆発音がした。事務所の建て付けの悪い窓ガラスがカタカタと鳴った。時を置かず、爆発音が相次ぐ。

「おい、あれは……」

大男が机に上げていた両足を下し、立ち上がると窓辺に寄る。

焼却炉が爆破されたのか。大男は窓ガラスをすかして外を覗くが、闇が広がっているだけだった。

「社長、北の支部がやられたそうです」

若い男が携帯電話片手に叫ぶ。

大男は窓ガラスに額を寄せ、黙って闇を凝視してつづけている。街灯の薄暗い裸電球の淡い光が闇を照らし、焼却炉建屋のまわりにぼんやりとしたグレイの空間をつくり出していた。

「社長、まわりの支部もやられているそうです」

大男は若い男には返事せず、窓ガラスに顔を寄せ、じつと闇のなかに広

がるグレイの空間を見つめている。

黒い影が微かに動いた。

「やはり、来たか」

大男は呟くと、若い男を振り返る。

「音をたてるな。ダイナマイト女が焼却炉建屋の裏にいる。見つからないように近づいて、女を捕まえろ。女が顔を出したらサーチライトで照らすからな。いいな」

火事のあと、空地となっていた敷地にはすでに大量の産業廃棄物が持ち込まれ、焼却炉建屋の横にはすでに廃材の山ができていた。山積みされた廃材の縁を伝い、若い男が焼却炉に近づいていく。

24

木実子は焼却炉建屋の陰から、じつと事務所のほうを窺う。まえには事務所と焼却炉建屋の間にも廃材やら古タイヤなどが雑然と山積みされていたが、火事のあとすっかり片付けられ、新しくできた廃材の山も整然積まれて見通しがよくなっていた。事務所には動きはない。彼女は身を屈め、焼却炉へにじり寄る。

突然、サーチライトが点り、光の輪が彼女を捉えた。一瞬たじろぐ彼女の全身を光が照らし出す。

つぎの瞬間、廃材の陰から男が飛び出し、彼女の足をとる。

彼女は地面に叩き付けられた。

手に持っていた三本のダイナマイト筒が宙に飛んだ。一本は廃材の山に

飛び、一本は焼却炉のまえに転がった。もう一本は男の顔を打ち、まえに落ちた。

彼女は急いで手を伸ばし、男のまえのダイナマイト筒を掴む。

男は彼女を押さえ込み、彼女の手からダイナマイト筒を奪い取ろうとした。

一瞬の隙を突き、彼女は右足で男の股間を思いきり蹴り上げる。

男が怯んで手を放した隙に、彼女は男の手をくぐり抜け、起き上がると走り出す。

そのとき、廃材の山の陰からひとりの男が忍び寄り、焼却炉のまえに転がったダイナマイト筒を拾い、小さな火種の上で廃材が微かに燻りつづけている焼却炉の奥へ投げ込んだ。

彼女は逃げる。ゲートをめざして走る。

事務所から大男が飛び出してきた。彼女のまえで両手を伸ばし、行く手を阻む。

彼女はダイナマイト筒を廃材の山へ投げる。だが手許が狂って廃材に跳ね返され、ダイナマイト筒は彼女の足元に転げ落ちた。

追いかけて来た男がすぐ後ろまで迫って来た。そして彼女に飛びかかるうと勢いよく跳ねる。

一瞬、彼女は落ちてきたダイナマイト筒を拾おうと、身を屈めた。

男の身体が目標を失い、身を屈めた木実子を飛び越え、宙を飛ぶ。そして大男の胸倉へ一直線に突き刺さる。大男が悲鳴を上げ、仰向けにでんぐり返った。

彼女は一瞬、頭上を飛び越えていく男を避け、身を低めながらダイナマイト筒を拾うと、廃材の山めがけて高々と放り投げる。そして身を起こし

かけたとき、彼女は腕を掴まれ、強い力で地面に押さえつけられる。

「伏せろ」

つぎの瞬間、轟音が響いた。瓦礫が飛び上がり、地面に降り注ぐ。

塵が舞い上がり、闇のなかに煙幕が張り巡らされた。

煙幕のなかを木実子は手を引かれて、産廃処理場の外へ逃れていった。

25

木実子の手首を強く掴み、男は全速力で走る。彼女はぐいぐいと引かれるまま、左右の足が機械的に交互に出して地面を蹴る。彼女は無意識のうちに自分を引っ張る力に全身を委ねていた。なにも考えることはなかった。ただ足を動かせばよかった。

ふたりは闇雲に足を動かし、街灯にない暗い道を走った。

雑木林のなかに停めてある車にたどり着いたとき、ふたりの息はすっかり上がっていた。ふたりは這うようにした車のなかにもぐり込む。

遠くから救急車のサイレンが近づいて来るのか聞こえた。彼女は後部座席に倒れこむと、すぐ眠りこんでしまった。

木実子は眠りのなかで、何度も早く遠くへ逃げなければと思った。だがどうしても目を開けることができなかつた。一瞬、目を開けようと思つても、すぐ深い眠りに落ちていくのだ。

何度かそんなことを繰り返しているとき、突然、強い光線が顔を射るのを感じた。

「おい、起きろ。起きるんだ」

男の声とともに、車の窓ガラスを激しく叩く音がした。

木実子は身を起こし、目を手で覆い、眩しい光を避け、窓に身を寄せて外を覗く。数人の人影が車を取り巻いている。雑木林の向こうの離れた道路に赤色の回転灯を点したパトカーらしい車が二台停車していた。

森野はハンドルを抱え、俯いた格好でまだ眠っている。

「起きて……」

彼女は窓ガラス越しに覗いている若い男の視線を気にしながら、森野の背に手を伸ばして軽く揺する。

「うん……」

「警官らしいわ……」

彼女は若い男を一瞥する。若い男は懐中電灯で手元を照らしながら、窓ガラス越しに黒い手帳を見せ、窓を開けるように指示する。

彼女はスイッチに手を伸ばし、窓ガラスを五センチほど下げた。

「警察の者だけど……」

若い男はふたたび警察手帳を示し、免許証の提示を求める。そして爆破事件の捜査中だという。

「どんなご用ですか……」

彼女は素知らぬ振りをして、受け流す。

「ここでのなにしてるのですか」

「疲れたので、休んでいただけです。いつのまにか眠りこんだようですが……」

「爆発音には気付かなかつたですか」

「さあ、別に……、あなた、気付いた？」

彼女は若い警官の不審そうな目に気付き、慌てて森野に声をかける。

「いつ……」

森野はあくびをかみ殺す。

若い警官は後ろを振り向き、年配の警官と一言、二言、言葉を交わす。

それからふたたび車に近寄り、窓越しに「お尋ねしたいことがあるので、本署までご足労願いたい」と高飛車に言った。

26

「ママが警官に連れていかれた」

耀が突然声を発した。日本ブースのホールでモニターを見ていたのだ。

数メートル離れたところで先輩のメンバーと話していた未佐は驚いて走り寄り、耀の後ろからモニターを覗く。

木実子と森野がパトカーに乗せられるところだった。

「どうしたのかしら。まさか爆破犯の嫌疑をかけられたんじゃないでしょうね」

「お姉ちゃん、ボク、ママを取り返して来る」

耀はいつの間にか、一人前のことを言う。

「待って、お姉ちゃんも行くから。そのままにどうすれば一番いいか考えなくちゃ。耀ちゃんはどう思うの」

未佐には耀の成長が驚きだったが、まだ無理だろう。それにしても、警察からふたりを取り戻すことは可能だろうか。

「ママは牢屋に入れられるの」

「そうね。単なる任意の事情聴取であれば簡単に済むだろうけど、もし逮

捕されたとなると留置場からなかなか出て来れないかもしれない」

「じゃ、警察署に着くまえに取り戻さなくちゃ」

「難しいことよ、それは……」

「早くしないと、間に合わない」

「そうだ。いい考えがある。さあ、行くよ、耀ちゃん」

未佐は耀の手を引いてブースを出ると、翔けだした。

27

「どうしたんだ。あの音は……」

壁を背にして机に座っている頭髪を短く刈り上げた中年の警官が顔を上げた。一回目の爆発音につづいて、間をおいて、爆発音が連続して数回つづいた。

一瞬、室内に緊張が走る。電話のベルが鳴る。話声が交叉する。

「主任、詳しいことはいま調べていますが、産廃処理場でまた爆発があったそうです。焼却炉が爆破されたらしいです」

若い警官が手に持っている受話器を返しながら、応えた。

「焼却炉か。それじゃ、あの二人連れは……」

主任の顔に困惑の表情が浮かんだ。爆破犯の容疑者を捕らえた警察をあげ笑うような爆発音だった。

木実子と森野の事情聴取をはじめようとした矢先に、突然、産廃処理場で焼却炉が爆破したのだ。あの二人連れは爆破犯ではないのか。

「主任、なにもそれらしいものは出てきません。鑑識も車から火薬の粉末

らしきものは見つからないし、どこにも硝煙反応はないといっています」

若い警官が書類を手にして、主任の机のまえに立って報告する。

ふたりを取調室の廊下で待たせ、持ち物や乗っていた車を徹底的に調べていたのだ。ダイナマイトやそれに類するものは見つからないし、爆破実行に用いたようなものも車には残されていないという。

ふたりはこれが最後だということなので、もしもの時のことを考え、まえの晩、ホテルに入るまえに車を徹底的に掃除をして、偽装用ナンバープレートや変装用塗料スプレーなど不要になったものをすべて処分していたのだ。それに最後の三本のダイナマイト筒だけを残し、残りのダイナマイトはすべて使い果たしたし、ダイナマイトを入れていた段ボール箱も途中の産廃処理場でダイナマイトもろとも焼却炉のなかに投入してしまっていた。

「あのふたりを爆破犯人とする証拠がなにもないじゃないか。それに新たに焼却炉が爆破されたとなると、まえの爆破が彼らの仕業かどうか断定しにくいな。これじゃ、逮捕状はとれそうもない」

「目撃者の証言だけじゃ弱いですか」

「目撃者？」

「産廃処理場の社長という男が……」

「いま病院に入っているんだろう」

「ええ、爆破の際に顔面にガラス破片を受けたとか……」

「それじゃ、調書をとることも、ふたりの面通しもできない。他にいないのか、二人連れを目撃したものは……」

「主任、ひとりいたのというのですが、それが昨日交通事故で死亡してしまっています……」

「ふむ、これじゃしょうがない。しばらく泳がせて、様子を見るか」

「じゃ、このまま帰らせていいんですか」

「簡単な事情聴取をやつて、かつこうを付けてから釈放だ。いいな」

主任は苦虫を嘔み潰したような顔をして、机から立ち上がった。

28

「社長、起きていますか」

若い男は携帯電話を手に、おそるおそるベッドに近づき、両眼を分厚い包帯で覆われている大男の耳元で囁く。

大男は焼却炉爆破で顔面に破片を受けて負傷し、両眼の手術を終えたばかりだった。手術後、集中治療室から無理やり個室に移してもらい、若い男が付きつきりで看病していた。

「うん……」

大男は包帯を巻かれた頭部を僅かに動かす。

「事情聴取されていた例の二人連れが釈放されるそうです。まだ繋がっています。話されますか……」

若い男は携帯電話を大男に手渡す。

「うん、うん。分かった。出てきたら、やつらを捕まえて逃がすな。事務所に閉じ込めておけ」

大男が携帯電話を耳から外す。若い男は手を伸ばして受け取ると、携帯電話をふたたび耳に当てる。

「ふむ……」

若い男は携帯を耳に当てたまま、廊下に出る。

29

「分からない。でも社長のことだから、眼帯が取れば、明日にも抜け出すつもりじゃないの。他はなんでもないんだから。そんじやな」

若い男は携帯電話器を畳むと、大きな欠伸をひとつした。それからぐるりと身体を回転させてゆっくり辺りを見回す。誰もいないのを確かめると、ふたたび個室に戻った。

「おい、どこにいたんだ」

低い太い声だ。

「廊下に出ているのですが、ご用ですか、社長」

「あの二人が警察に捕まっているときに、焼却炉が爆破されたというのが本当か」

「確かに爆発音らしいのが聞こえましたが……」

「何回だ」

「何回か、確かなことは分かりませんが、四、五回あったようです」

「どこどこか調べてくれ。それから誰かに支部の名簿を持って来させてくれ」

大男は名簿がひとりで空を舞っていったという話を思い浮かべていたのだ。その話を聞いたとき、まともな話とは思えず、頭から聞く気になれなかったが、ダイナマイト女が警察に捕まっているのに、新たな焼却炉爆破が起きたことを知り、不意にあの話が甦ってきたのだった。

大男は妙に頭に引つ掛かるものを感じながら、名簿が蝶のように宙を舞う様子を何度も思い浮かべていた。

「あ、ママが出てきたよ、お姉ちゃん」

携帯用のモニターを覗いていた耀が大声を出した。

警察署のエントランスの自動ドアが開いて、木実子と森野が外へ出てきた。ふたりは一端、玄関テラスで立ち止まり、辺りを見回している。

「車はどこかしら」

木実子は森野を振り返る。係官の話では、車は駐車場に停めてあるはずだった。

「駐車場は建物の裏かもしれないね」

警察署の周りには照明灯があっても、やはり夜は暗い。建物の陰となると、照明の届かないところがあつて、車の識別は近くぬ寄りないと分からない。

駐車場にはパトカーや普通乗用車が十数台、それに白バイが数台が並んでいる。ふたりは駐車している車に近づき、一台一台確かめていく。

突然、車の陰から数人の人影が飛び出した。木実子と森野の背後に忍び寄った。さつと頭から大きな袋を被せ、全身を包み込むと、ふたりを担ぎ、

近くの車に押し込んだ。

一瞬の出来事だった。

「あ、ママが連れていかれる。お姉ちゃん、早く……」

耀が叫ぶ。

ヘッドライトを消した車が警察署の裏門から出て、すぐ姿を消した。

「お前たちは気楽なもんだ。他人の焼却炉を爆破して、しゃあしゃあとしているが、おれたちは好き好んで悪辣なことをやって金儲けしようとしているわけではない。貧乏人には法をくぐり抜けてでも生きなければならぬ。厳しい現実があるんだ。毎日を生きるために止むを得ずやっていることなんだよ。妻子を養うためにはどんなことでもする。他に道はないんだ。死んでしまえば楽だけど、生きていなければなにもできない。なにも変わらないのだよ」

「だからといって、ダイオキシンを撒き散らしていいの。ダイオキシンは猛毒な化学合成物質だ。ダイオキシンを浴びた住民はどうなる」

「おれたちは毎日ここで煙を吸っている。悪い影響があるというが、なんともないではないか」

「そんなことを言っているけど、これから吐きだされるダイオキシンの世の中にどんなことが起こるか分かっていないの」

「分からないからダイオキシンを出して……」

「分からないからといって、住民をモルモット扱いにしてもいいのか。日本の国民をモルモットにしているんだぞ。これでいいのか。この国の未来は、そして人類の未来はどうなる」

「おれたちはただ生きていきたいのだ」

「だが社会がなければ、どうなる。ひとりぼっちで生きていけるのか。どうやって生きていくのか」

「そんなことをいっても食うものがほしい。わが子を餓死させるわけにはいかない。ひとりひとりが生きていなければ、社会も国家もないじゃない

か。人類の未来もないと違うか」

「そうやっているうちに、みんなが死んでしまう。それでもお前さんはひとりだけ残りたいのか」

「……………」

「なにもわざわざ法規制のない小型焼却炉で産業廃棄物を燃やし、周辺にダイオキシンを撒き散らさなくてもいいだろう」

「そうさせたくなければ小型焼却炉についても法規制すればいいだけの話さ。それをそうしないのは小型焼却炉の使用を奨励していると言えなくもないではないか。おれたちは法を遵守しているにすぎない。爆破犯にとやかく言ってもらいたくない。お前たちは自分のやったことに対して償いをしなければならぬ。元を糺せば、産業廃棄物もお前たちが廃棄したものだ。これを燃やした煙がどんな臭いか十分嗅いで、胸いっぱい吸い込むがいい」

廃材を積み重ねた頂上に間隔を置いて二本の柱が立てられた。

男たちが太いロープでぐるぐる巻きにしたふたたりを重機を使って廃材の山に持ち上げていく。まず、右の柱の先端に木実子を吊るす。つづいて、

左の柱に森野を吊した。まるで「ミノムシ」のようだった。

「社長、できました。どうしますか……」

大男はソファから身を起こし、若い男に支えられて窓辺に寄り、事務所にしているプレハブ建屋の小さなガラス窓から外を覗く。

産廃処理場のゲートから入った右側に事務所があった。そのまえに広がっている空き地が廃材や古タイヤの置き場になっているのだ。

一時は高々と積み上げられていた廃材の山も、火事で燃えつくしてしまった。いまの廃材はそのあと搬入したもので、積み上げられた新しい廃材の山はまだ数メートルにも達していなかった。

頂上に二本の柱が見える。柱にはロープでぐるぐる巻きにされたふたりが「ミノムシ」のように吊るされているが、大男にははつきり見えない。大男は眼帯を外したばかり目にかけている黒いサングラスを下げ、じっと目を据える。

「あれが爆破犯か……」

しばらく、二本の柱を見ていたが、やがて、彼は廃材の山の向こう側へ目を向ける。そこには焼却炉建屋があるはずだった。だが建屋も焼却炉もなく、すべてが瓦礫の山と化していた。付近にはまだ瓦礫が散乱したままだ。

あのふたりの仕業だ。身体が震え、むらむらと怒りが込み上げてきた。

彼は廃材の山に火を放ち、ふたりを火あぶりにしたかった。そのまえに、たっぷり煙を嗅がせるのだ。

彼は二本の柱に目を移す。そして二体の「ミノムシ」人間が煙に焙られ、煤けて脂を垂らし、萎びて細くなり、燻製人間ができ上がっていく様子を感じ描く。

燻製人間を思い描いているうちに、彼は怒りが徐々に収まっていくのを感じた。彼はサングラスをもとに戻し、ソファに戻り、身を横たえる。

32

「ミサ、これを持っていくがいい」

アムンが小さな包みを差し出した。

「あの……、これは……」

突然、目の前に現れたアムンに驚き、未佐は声が出ない。耀も口を開け、アムンを見上げている。

「これはボタンタイプの超高性能ダイナマイトだ。小さいが爆発力が大きい。小型の焼却炉なら一個で十分だろう。それから、やつらのそばには決して近づかないように。きみたちを捕まえようと、ワナが仕掛けてあるから注意するように。いいね。じゃ、気をつけるんだよ」

言うだけ言うと、アムンは消えた。

未佐はアムンが消えた方向をしばらく見ていた。それから手に持っている小さな包みに目をやる。彼女にはなぜアムンがこの包みを持ってきたのか、理解できなかつた。焼却炉の爆破をすすめているのか、それとも未佐たちの行動を監視していてダイナマイトを必要としているか、それとも未佐

ふと、彼女は耀が「ダイナマイトがない」と言っていたことを思い出し、

耀を振り向く。モニターで木実子たちを追っていた耀がダイナマイトを欲しがったのかもしれない。そのことをアムンが感知したにちがいない。

「耀ちゃん、ダイナマイトを欲しいの……」

彼女は耀の目を覗く。

「……………」

耀は上目で未佐を見た。

「耀ちゃん、これを持って行こうか」

「うん」

やはりそうだったのだ。その瞬間、彼女は全身を戦慄が走るのを感じた。

「早く、お姉ちゃん」

耀が未佐の手を引く。彼女は引かれるまま、走り出す。

いつの間にか、耀の手に小さな包みがあった。

33

未佐は名簿に添付された地図を見ながら小型焼却炉を探し、耀が上空から煙突のなかにボタンのような小さなダイナマイトを投入していく。名簿は産廃処理場の事務所若い男から奪った大男の系列産廃処理場のものだった。若い男は支部と言っていたが、大男が経営する産廃処理場なのだ。

産廃処理場支部は大男の事務所のある産廃処理場の周囲に同心円を描いて点在していた。これらが相互に連係してまるでひとつの巨大な産廃処理システムのように機能するようになっていた。いや、単なる巨大な産廃処理場ではなかった。一基の小型焼却炉による少量の産業廃棄物処理から複数の小型焼却炉による大量の産業廃棄物処理まで何段階にも柔軟に対応でき、一基の巨大産廃処理場以上に機能していたのだ。

未佐と耀は遠く離れた支部の焼却炉から順次ダイナマイトを仕掛けていく。ダイナマイトは火入れしたときに爆発する仕掛けだった。

いくつかはすでに爆破されて、瓦礫と化しているものもあったが、まだ殆どが健在で、夜中にもかかわらず、なかには煙を吐き出しているものさえあった。

「耀ちゃん、まだものを燃やしている使用中の焼却炉は後回しにしておこうね」

未佐はものに憑かれたように熱中している耀に何度も注意する。なかには煙が出ていないが、まだ火種が残っている焼却炉もあるのだ。だが木実子を早く助け出したい耀には合図を待っている余裕がないのか、耀は生返事を繰り返すだけだった。

未佐は焼却炉に近づいて火種がないか調べる。それからダイナマイト投入の合図を送るが、耀は待つておれないのか、そのときにはすでにダイナマイトを持った手を煙突にかざしているのだ。

ふたりは急いで作業を進める。だが思ったよりも時間がかかった。ダイナマイトを投入する焼却炉は一〇〇を超えるし、それらが数十キロの範囲にわたって点在しているのだ。作業を了えたときには、すでに東の空が白みかけていた。

目の前に、大男の産廃処理場があった。

白みかかった空を背景に、廃材の山に二本の柱が浮かんでいる。

「耀ちゃん、近づいたらダメよ。ワナが仕掛けであるから」

「でも、あの柱にママが吊るされているんだ。早く助けないと……、お姉ちゃん」

耀がいまにも翔け出そうと身構える。未佐は耀の腕を掴み、必死で押さえる。

「そばに寄ったら、捕まるかもしれないのよ。捕まったら、耀ちゃんも吊るされてしまう。そうになったら、耀ちゃんがママを助けることができなくなる。大丈夫がどうか、様子を見てからね。一寸、待つてね」

未佐がおそろおそろ廃材の山に近づいていく。

突然、遠くで爆発音がした。

振り向くと、耀が翔てくる。未佐は近づいてくる耀の手を取り、制止する。

爆発音がした。数発の爆発音がつづいた。

事務所から背の低い男が飛び出し、辺りを窺う。廃材の山の二本の柱に二体の「ミノムシ」が吊らされていることを確認すると、いそいそと事務所へ戻っていった。

34

「社長、別に変わったことはありませんでした」

突然、爆発音が響いた。

「いまの音はなんだ。また焼却炉が爆発されたのじゃないのか」

大男はソファから身体を起こし、前に立っている背の低い男を見た。男は携帯電話を取りだし、急いで耳に当てた。

「焼却炉が爆破されたそうです」

爆発音がつづく。

一体、誰が焼却炉を爆破しているのか。ダイナマイト女と男は捕らえている。だとすると別に強力な連続爆破犯がいるのだ。

大男は宙を舞う名簿の話の思い浮かべた。やはり、あの話は出鱈目でなかったのか。あのとき、ある筋では「天」のグループの仕業にちがいないといっていたが、あれは本当のことだったのか。

そのとき、大男は上の空で聞いていた。そんなことはあるはずがない。

いや、そんなことがあつてたまるかという思いだった。法律違反のぎりぎりのところを凌ぎ、苦勞して営々と築き上げてきた産廃処理王国がそんな得体のしれないものたちに滅ぼされるようなことがあるはずがないのだ。もし、連続爆破が「天」のグループの仕業なら、やつらを捕まえ、やつつけてしまわなければならない。

「おい、焼却炉の爆破はどんな順だ。名簿の順か……」

爆発音がつづく。

「うちの支部だけが狙い撃ちされているようです。遠いところからこちらに近づいてくるように爆発が起きています……」

「本当か……」

大男は突然わなわなと身体が震えるのを覚えた。必死に震えを止めようとするが、ますます震え、かえって激しい震えが襲ってくるのだ。大男は右腕をソファの背に回し、左手でソファのクッションを押さえ、ソファにしがみつく。

「社長、社長……」

「……」

大男は手を伸ばし、ソファから立ち上がろうともがく。男が大男の手を取る。大男は男に支えられて起き上がると、事務所の外へ出た。

廃材の山が目の前にあつた。頂に聳える二本の柱が見える。「ミノムシ」が僅かに揺れている。

大男は憎々しげに「ミノムシ」を見上げる。きつと、もうじき「天」からの救助隊が現れるにちがいない。そのときやつらを捕まえるのだ。

「『ミノムシ』をよく見張れ。誰かが助けにくるはずだ。そのやつを捕まえるのだ。手強いから、ひとを集めろ。爆破された支部の連中を呼び寄せ

るんだ。早くしろ」

大男はじつと「ミノムシ」を見守る。「ミノムシ」が妙に揺れている。一瞬、誰かが「ミノムシ」を柱から下ろそうとしているのではないかと思っただ。

大男は廃材の山に近づく。サングラスを外し、じつと目を凝らす。「ミノムシ」の揺れが収まったようだ。

大男は「ミノムシ」に目をあて、じつと立ち尽くす。揺れそうで揺れない。救助隊はまだなのか。

車の音がした。つづいて、小型トラック、乗用車など、何台ものさまざまな車種の車が産廃処理場の広場に入ってきた。ダンプカーもあった。

男たちがどっと集まった。だが「ミノムシ」に動きがない。いつまで待っても微動だにしない。

男たちがざわつきだす。

「おい、火をつけろ。廃材に火を放て」

大男はこらえ切れなくなつて、叫ぶ。

「社長、火をつければ、あのふたりは死んでしまいますよ。ふたりを殺す気ですか」

背の低い初老の男が、低いが強い語調で言う。

「殺しやしない。燻りだすだけだ。目に見えないやつを誘い出すのだ。早く、火をつけろ」

「……………」

初老の背の低い男は腰を下ろして、動こうとしない。

「おい、お前、事務所からぼろ切れと灯油をもってこい。それで松明をつくるんだ。いいな」

大男は別の若い男に命じる。

柱の「ミノムシ」が微かに動いた。

「早く、火を放て」

誰も火をつけようとしなない。

大男が手を伸ばす。即製の松明が手渡された。大男は棒の端に括りつけたぼろ切れを灯油に浸した。

大男はズボンのポケットからライターを取り出した。左手に持った松明が揺れる。大きく息を吸うと、ライターを近づけ、火を点ける。

ぼろ切れから火炎と黒い煙が立ち上った。

大男はしばらく、じつと、炎を見つめていた。それから、廃材の山に燃え盛る松明を投げ込んだ。

35

石油の燃える臭いがした。木実子は目を開け、下を見た。煙が立ち上っている。すぐ煙が襲ってきた。

森野も気づいたようだ。なんとか煙から逃れようとしているのか、盛んに身体を動かしている。

「もう、ムリだわ」

木実子は口の中で呟く。廃材の山にダイナマイトを投げ込んだことを思い出した。彼女は目を閉じた。

この数か月の出来事が目まぐるしく脳裏を駆け巡る。だが彼女はもうどうでもよかった。

ダイナマイトを握りしめながら、焼却炉を襲うとき、いつもいずれ死んで、自分も耀のところに行くだろうと思っていたような気がする。それでもこんな形で死ぬとは一度も想像していなかった。

火がダイナマイトに迫る。三〇秒後か、一分後か、ダイナマイトは大音響を上げ、廃材の山を木端微塵に吹き飛ばすのだ。

胸の動悸が音を立て、激しく打つ。

彼女は身体をくねらせ、身体を揺らした。

爆破した焼却炉を数える。思ったほどの成果はなかったが、それでも僅かばかりの達成感を味わった。耀をあんな身体にしたダイオキシンの復讐からはじめたことだったが、おかしなことに、いつの間にか一度味わった達成感がつぎの行動を駆り立てる一方、行動の支えとなっていたのだ。

彼女自身、考えれば考えるほど、なんともおかしなことだった。小さな焼却炉を一基爆破したところで大気中のダイオキシンの濃度がどれだけ減せるのか、そしてそれが殆ど無視されるような値にすぎないことは分かっていたことだった。それなのに、焼却炉を見ると、ダイナマイトを投げ込まずにいられないのだ。

なにが行動を駆り立てるのか。

目を開け、横を見ると、森野が身体をくねらせ、大きく揺すっている。揺れがだんだん大きくなった。彼女も真似る。もしかしたら、ロープが柱から離れるかもしれない。離れてぐるぐる巻きにされた身体が廃材の山を転げ落ちていくのだ。

「もつと大きく揺れる。もつと大きく……」

彼女は一心に身体をくねらしては、反動をつけて足を振る。

揺れは次第に大きくなった。柱が軋む。揺れの最先端で反転して揺れが

戻るとき、彼女がさらに反動をつける。揺れが大きくなり、柱が大きく揺らぐ。

煙が襲う。咽せる。息を止め、身体を揺する。

柱が大きく揺らいだ。もう少しだ。

煙りつづけていた廃材の山に、突如、火が走った。大きな炎が上がった。

次の瞬間、轟音が響いた。

廃材が飛び散り、細かな塵芥が舞い、宙を飛ぶ。一面に瓦礫が散乱する。

二本の柱も吹っ飛び、柱から二体の「ミノムシ」が離れ、空高く飛んだ。

舞い上がった粉塵が煙と一体になり、一帯に煙幕を張り巡らしていく。

やがて、すべてが煙幕に包まれていった。

第四章

36

「耀ちゃん、いまよ。行くわよ」

未佐は耀の手を引き、翔け上がる。

ダイナマイトが爆発した瞬間、二体の「ミノムシ」も柱もろとも吹き飛ばされて空に舞い上がる。空中で「ミノムシ」が柱から離れ、ばらばらに飛んでいく。

ふたりは空を翔け、「ミノムシ」を追いかける。飛び上がった「ミノムシ」が頂点に達して落下し出す瞬間を捉え、「ミノムシ」から垂れ下がるロープの先端を掴む。「ミノムシ」が柱に吊るされていたロープだ。未佐と耀はロープをたぐり寄せ、「ミノムシ」を勢いよく手前に引き寄せる。

耀は木実子の「ミノムシ」を、未佐は森野を引く。ロープを引かれた「ミノムシ」はまるで湖面を曳かれるボートのように、すすいと空中を飛んでいく。

「左手に大きな森があるでしょ」

未佐はどんどん先へ翔て行く耀に声をかける。

産廃処理場を包んでいた煙幕はじよじよに薄れていく。眼下に瓦礫の山が姿を現しはじめた。

爆風に飛ばされたのか、地面には多数の男たちが倒れている。なかには瓦礫の下敷きになっているものもいた。大男は目を押さえ、蹲っている。

未佐は男たちに感付かれないようにスピードを上げる。耀も先頭に出た

未佐に遅れまいとスピードを上げて追いかける。「ミノムシ」のふたりは失神しているのか、それともショックで心臓が停ったのか、ビクともしない。

真下に深い森が見えた。森の奥に湖があった。湖水が初秋の陽光を浴び、きらきらと光っている。

未佐は耀に合図を送り、対岸の湖畔に広がる草地をめざして落下していく。「森野ミノムシ」につづいて、「木実子ミノムシ」が着地した。

ふたりは二体の「ミノムシ」を草地に横たえる。そして「ミノムシ」のロープを解いていく。

「ミノムシ」の顔は煙ですっかり黒く煤けて、木実子か、森野かの見分けがつかないくらいだった。だがロープを解いていくと、見覚えのある柄のブラウスを着た木実子が現れた。

「ママ、ママ」

耀が木実子にしがみつくが、眠ったまま、全然反応がない。

「ママ、どうしたの。ママ、起きて……」

耀が木実子の身体を揺する。目は閉じたままだ。

上空からヘリコプターの爆音が響いた。

「耀ちゃん、ママを早く隠して」

ふたりはぐったりしている木実子と森野を引きずり、木陰に入る。

湖の上空を旋回していたヘリコプターが何かを見つけたのか、急に降下をはじめ。草地にロープを放置したままだった。未佐は急いでロープをたぐり寄せる。彼女の手元でロープは消えていった。

ヘリコプターが湖水すれすれまで降りてくる。湖面にざざ波が立ち、湖水がしぶき、飛沫が激しく飛ぶ。

つぎの瞬間、ヘリコプターが上昇をはじめた。

「ママ……」

耀は指で木実子の脛を開き、目を覗き込もうとするが、うまくいかない。なにをやっても反応がないのだ。

しばらくして、森野が目を開いた。周りを見回し、木実子に気づくと、上半身を起こし、両手を使ってにじり寄る。一晚中ロープで巻かれ、吊るされていたせいか、足を思うように動かすことができないらしい。

「木実子さん、木実子さん……」

激しくゆすり、平手でぱたぱたと頬を打った。

「目を覚ますんだ」

両眼の脛が動き、木実子は細目を開ける。

「ここどこ。耀は……、耀はどこ」

木実子は目を大きく開き、頭を回す。身体を起こそうとするが、思うように動かせない。

ママの声を聞いて、耀が飛んでいく。だが木実子にはなにも見えない。

未佐はそばで黙って見ている。

「耀ちゃんはいないよ。われわれはまだ生きているらしい」

「森野さん、ホント……」

木実子は信じられないのか、盛んに目を回し、辺りを見回す。

「耀が助けてくれたんだわ、きつとそうよ」

「そう言えば、未佐さんの声が聞こえたような気がする」

森野も半信半疑の面持ちで、相槌を打つ。

耀は悲しそうな面持ちで木実子を見ている。未佐は耀の肩に腕を回し、

耀の背を撫で、抱きしめる。

ふたりは木実子と森野のすぐそばにいるのに、会話に加わることもできず、黙って話を聞いているほかなかった。

「耀ちゃん、ママには耀ちゃんが見えないのよ。声も聞こえないの」

「でも、ボクがママを助けたんだ」

「そうよ。ママには耀ちゃんが助けてくれたことが分かっていると思うわ。そのうち、ママとも話すことができるようになるかもしれない」

「ホント……。でもママが死んじゃいやだ。話せなくとも、生きていなくちゃ」

未佐は耀がこんなことを言うとは信じられなかった。自分が死んでいることを知ってしまったのだ。耀は自分と木実子が別の世界にいることを理解しているのか。

「アムンにママと話す方法を教えてもらいましょうよね。アムンなら、その方法を知っているわ」

未佐は夢の世界を思い描いていた。木実子の夢のなかに耀が入っていくことができるのではないか。テレパシーで話すこともできるかもしれない。

彼女は耀を強く抱きしめると、立ち上がった。

アムンの呼ぶ声が聞こえた。帰還命令だった。

「耀ちゃん、帰るわよ。ママとお別れして……」

「ママをこのまま放っておくの」

「森野さんと一緒だから大丈夫よ。それにわたしたちがここにいるとかえって危険だそうよ。アムンが心配しているの。さあ……」

未佐は耀の手を引いた。ふたりは「天の基地」へ向かって翔けていく。

37

「おい。救急車を呼べ。早く、呼ぶんだ」

大男は片手で左目を押さえ、もう一方の手を振り上げて叫ぶ。だが誰もいないのか、返事がない。

大男はじつと一方の開いている目を凝らす。だが辺り一面にまだ煙と粉塵が充満しているのか、視界が遮られてなにも見えない。

粉塵を吸い込んだのか、急に激しく咽せる。目から手を放し、手で口を押さえる。血の臭いに気づき、掌を見ると、血がべつとりと付いている。爆風で飛んできたガラスの破片が目突き刺さっているのか。

大男は咳をしながら、蹲る。

「社長、大丈夫ですか」

瓦礫を払いのけてひとりの男が立ち上がる。傷を負っているのか、右手で左腕を押さえ、足を引きずっている。

舞い上がった粉塵が次第に収まり、視界が開けてきた。瓦礫が一面に飛び散り、多くの男が瓦礫の下敷きになっていた。

瓦礫がもぞもぞと動き、瓦礫を払いのけ、下敷きになっていた男たちがはい出る。男の多くは爆風や飛び散った廃材で手足や顔が負傷していた。瓦礫の襲撃を逃れた男たちも四方から歩み寄り、社長のまわりに集まってくる。

「吊るしていた二人をなんとしても探し出せ。生きていたら、絶対逃がすな」

大男は立ち上がり、男たちを見回す。土埃や粉塵を浴びたせいか、一樣に、頭髮は埃に塗れて灰色になり、顔はうす黒く汚れ、目だけがぎらぎら

光る。

遠くの方から、救急車のサイレンが近づいてきた。

38

「おお、無事だったか」

アムンだった。「天の基地」の入口で、未佐と耀を待っていた。

「なにか、変わったことでもあったのですか」

未佐は怪訝な顔を向ける。アムンの出迎えを受けるとは考えてもみなかったことだった。

「実は、『黒の集団』が動き出した。これまでは陰で策動していたが、今回のことで作戦を変えるだろう。そこで……」

アムンは歩きながら、話しはじめる。

「今回のことで……、作戦を変える？」

「そうだ。彼らは今回、産廃処理場焼却炉爆破事件に『天の組織』が関与している確証を握った。それでこれまでの作戦を全面的に見直すことになるだろう」

未佐が産廃処理場事務所から支部名簿を持ち出したとき、うかつにも名簿を隠さなかったために名簿だけが宙を舞うことになってしまった。これに疑惑を抱いた「黒の集団」が「天の組織」関与の証拠を掴もうと、今回の「ミノムシ」にワナを仕掛けていたのだった。

「ワナが……」

やはりワナがあつたのか。未佐は手に力が入り、思わず耀の手を強く握

る。

「お姉ちゃん、手がイタイ……」

耀が泣き出しそうなしかめ面をした。

「ごめん、ごめん。耀ちゃん、ワナにかかったらしいの、わたしたちは……」

「ワナって……」

「ママと森野さんを救い出したとき、敵は耀ちゃんとお姉ちゃんを捕まえよう」と待ちかまえていたらしいの。そのとき捕まえることができなかった

ので、わたしたちを捕まえよう」とヘリコプターで追いかけてきたのよ」

「ヘリコプター……」

耀は首を傾げて、未佐を見る。

「ほら、湖畔の草原でママたちのロープを解いていたとき、突然、ヘリコプターが飛んできたでしょ。あ那时的ヘリコプターよ」

未佐は耀をなだめるように話してから、アムンに顔を向ける。

「われわれが関与していることの確証を握った『黒の集団』は、『天の組織』と全面的に対決することに方針を変えるだろう」

アムンは立ち止まると、耀と未佐を正面からじつと見る。しばらくしてアムンは改まった声で言いだした。

「きみたち、ふたりは『天の組織』の正式のメンバーとして『黒の集団』との全面的対決に備えてほしいのだ。そのまえに、『天の組織』の正式のメンバーとなるためにさまざまな関門を通過しなければならぬが、きみたちはそれをクリアできるだろうし、きみたちにしてもそれを望むことだろう。きみたちはこれをどうしてもクリアしなければならぬのだ」

未佐にはアムンの言っていることが理解できなかった。大体、「天の組織」といつてもいまだにどんな組織かよく分からないし、その正式のメンバーになるということはなにを意味するのか、これまた考えつかないことだった。それに「きみたちにしてもそれをどうしてもクリアしなければならぬ」とはどういうことか。

未佐には分からないことだらけだったが、なんら抗することなく、アムンの言葉がなぜか胸の奥へしみ込んでいくように吸い込まれていく。これが運命なのだ。こう思った瞬間、彼女は耀と一緒に「天の組織」の正式メンバーの白い制服を纏っている自分の姿を見たのだった。

「『黒の集団』とはなんですか。『黒の集団』は『天の組織』に刃向かってまで一体なにを目論んでいるのですか」

「地球はいま、人間によって貪り食われている。そのため、地球は年々衰え、再生するどころか、日々衰退の一途を辿っている。それにもかかわらず、人間は地球を貪り食いつづけることを止めようとしなない。その元凶であり、その支配勢力の一派の尖兵が『黒の集団』なんだよ。彼らは地球だけではなく、九九・九九九パーセントの人間をも食いものにしようとしているが、彼らの目論みは地球の完全支配ということなんだ。そしてこのためにあらゆる手段を講じて邪魔者を排除しようとしているのだ」

「ヘリコプターも自在に操って……」

「そうだ。彼らは最新鋭の装備を誇る精鋭をそろえている。今回、きみたちはよくやつたが、彼らに対抗するには、残念ながら、まだまだ不十分なのだ。しばらく訓練が必要だろう。それから……」

「でも、ママが……」

「耀くん、大丈夫だよ。彼らが対決しようとする相手はわれわれ『天の組織』なんだよ。ママたちはすでに安全なところに移動しているはずだ。心

織」といつてもいまだにどんな組織かよく分からないし、その正式のメンバーになるということはなにを意味するのか、これまた考えつかないことだった。それに「きみたちにしてもそれをどうしてもクリアしなければならぬ」とはどういうことか。

未佐には分からないことだらけだったが、なんら抗することなく、アムンの言葉がなぜか胸の奥へしみ込んでいくように吸い込まれていく。これが運命なのだ。こう思った瞬間、彼女は耀と一緒に「天の組織」の正式メンバーの白い制服を纏っている自分の姿を見たのだった。

「『黒の集団』とはなんですか。『黒の集団』は『天の組織』に刃向かってまで一体なにを目論んでいるのですか」

「地球はいま、人間によって貪り食われている。そのため、地球は年々衰え、再生するどころか、日々衰退の一途を辿っている。それにもかかわらず、人間は地球を貪り食いつづけることを止めようとしなない。その元凶であり、その支配勢力の一派の尖兵が『黒の集団』なんだよ。彼らは地球だけではなく、九九・九九九パーセントの人間をも食いものにしようとしているが、彼らの目論みは地球の完全支配ということなんだ。そしてこのためにあらゆる手段を講じて邪魔者を排除しようとしているのだ」

「ヘリコプターも自在に操って……」

「そうだ。彼らは最新鋭の装備を誇る精鋭をそろえている。今回、きみたちはよくやつたが、彼らに対抗するには、残念ながら、まだまだ不十分なのだ。しばらく訓練が必要だろう。それから……」

「でも、ママが……」

「耀くん、大丈夫だよ。彼らが対決しようとする相手はわれわれ『天の組織』なんだよ。ママたちはすでに安全なところに移動しているはずだ。心

配しなくともいい。耀くんがママのそばにいと、ママたちも『黒の集団』の標的にされてしまう」

「……………」

「耀ちゃんはママにもう会うことができないのですか」

空ろな目をしている耀を見て、未佐は大きな声を出す。

「いまはダメだ。けど、訓練すれば会うことも話すこともできるようになる。でも訓練するには、まずママから自立することからはじめなければならぬのだよ」

アムンは一瞬、「できるかな」と問うような目を耀に向ける。

「うん」

耀は口を堅く結ぶ。

アムンは歩き出す。ふたりはあとにつづいた。

日本ブースのある建物が目に入る。

「会議が開かれている。きみたちも傍聴するといいい。いずれ、正式メンバーになるのだから」

アムンは姿を消した。

未佐と耀はブースの扉の前に佇み、しばらくブースのある建物を眺める。

扉を押してなかに入るか。一歩足を踏み入れれば、「天の組織」の正式メンバーへの道を歩んでいくほかない。扉のなかに入れば、もう戻ることほできないのだ。

未佐は耀を振り返る。耀は口を堅く結んで、扉を睨んでいる。未佐は耀の手を取り、扉に向かって一歩を踏み出す。

39

「おい、見つかったか」

病室に入ってきた若い男に気づき、大男はベッドから包帯で覆われている顔を上げた。包帯の隙間から片目が覗いている。

「いいえ、いくら探してもロープの欠けらさえ見つかりません。社長、木端微塵に砕け散ったとしか考えられないのですが……。もしそうなら、早く手を打たなければ、ヤバイことになるス」

「バカ言うな。どこを探したんだ」

「扉の外までくまなく探したんですが、それらしきものがどこにもないです。どこかへ飛んでいったのでしょうか」

「うむ……。そうか」

大男の頭にひとつの考えが閃く。

「なんですか。社長……」

「『ミノムシ』の欠けらさえないんだな」

大男は宙を舞う名簿の話の思い浮かべる。一度「黒」の連中に聞いてみなければなるまい。「ミノムシ」が空を飛んだとすれば、あの連中にはその様子が見えているにちがいない。

「もつと広い範囲を探すんだ。必ず、どこかに隠れているからな。あのふたりは爆破犯に間違いない。あの女を決して逃がすな。いいか、徹底的に探すんだ。早く行け」

若い男はあたふたと病室から飛び出す。

「大丈夫？ 動けない？」

森野は木実子の目を覗く。木実子はじつと横たわったまま、動こうとしない。

ヘリコプターは一端去ったものの、新たな追手が現れないか、彼は気が気でなかった。早く安全なところに逃げたかった。

ふたりの身体をぐるぐる巻きにしていた長いロープが二本放りだされたままだ。彼はロープを手と腕を使って巻き、小さく束ねる。束ねたロープを力いっぱい藪の茂みのなかへ放り込む。

彼は自分たちの痕跡をひとつひとつ消していく。木実子は草地に上半身を起こしたものの、じつと湖面を眺めているだけで動こうとしない。

「さあ、行こう。おんぶして……」

彼は背を向ける。

「わたし、間違っていたのかしら……」

木実子は湖面に目を向けたまま、呟く。

「うん、なにが……」

彼には木実子の言いたいことは分かっていた。だが彼はしらっぽく覚えて知らないふりをし、背を向けたままだった。

「間違っていたのよ。あなたまで巻き込んでしまつて……」

「さあ、早く逃げよう。追手が来るから」

「わたしはもういいわ。あなただけ逃げて」

「なにを言っている。一緒に逃げなくちゃ」

「わたしは歩けない。足が動かない。腕も言うこと聞かないわ……」

「さあ、早く、おんぶして」

彼は木実子の両腕を掴み、背に乗せる。

立ち上がるうとしたとき、対岸に追手らしい人影が現れた。遠く離れていて判然としないが、一人が湖畔に立って望遠鏡を構え、こちらを見ていように見える。彼は急いで木実子を背から降ろし、ふたりは伏せる。

人影が増えた。車が見えた。彼は木実子を抱えて地面を這い、藪のなかに引きずっていく。

彼はススキやイバラを押しわけ、すき間をつくり、藪の奥へと進む。藪のなかに獣道らしい細長い空間があった。彼は木実子を空間へ引きずり込む。

突然、車が近づいてくるような音がした。彼は一端、進むのを止め、振り返り、耳を澄ます。

「しーっ。動かないで……」

彼は追手に感付かれないように、木実子を両腕で抱いて動かないように押さえ込み、車が通過するのをじつと待った。

不意に、エンジンの音がすぐ近くでした。人声がする。足音が近づく。

彼は木実子を強く抱きしめ、耳元で「しーっ」と囁く。

竹の棒で藪を叩く音がした。下から藪のなかを覗き込む人影が写る。彼は頭を地面に着け、身体を小さくする。

一端、足音が去るが、藪を棒で突つつく音が何度も執拗につづく。

棒の尖頭が飛んでくる。ふたりは小さく縮こまり、右や左から襲いかかる棒の攻撃を避ける。

棒が木実子の背を突いた。

「あ……」

彼は急いで手で彼女の口を塞ぐ。

棒の攻撃も次第に減り、足音もまばらになった。

やがて、人声が遠のいていく。車のエンジンの音も聞こえなくなった。

静寂が戻っていた。彼は身体から力が抜けていくのを感じた。

木実子はいつのまにか眠ってしまつたらしい。かすかに寝息が聞こえる。

急に睡魔が襲ってくる。彼は木実子を抱いたまま、深い眠りに落ちていった。

彼は昏に生暖かい感触を感じた。何時間も眠っていたような満ち足りた気分だったが、どうしても目を開けることができない。彼はそのままうつらうつらしていたが、ふたたび眠りに落ちていく。

彼は夢を見た。木実子も一緒だった。

空は澄み、晴れ上がっている。目の前に澄んだ湖水を湛えた湖面が広がり、対岸には森が左右にのびている。湖畔に煙突のある小さな白壁の家があった。

彼はテラスで椅子に腰を下ろし、湖面に遊ぶ水鳥を追っていた。木実子は隣で紅茶を飲んでいる。白いテーブルの上の籠にはブドウやリンゴなど季節のさまざまな果物が山盛りだった。

彼はブドウを一粒摘んで、口のなかに放り込む。甘酸っぱい果汁が口の中に溢れ、ゆつくりのどの奥へ流れていく。

時が止まったようだった。音がなかった。静穏というより、不気味なほどに音が消えている。

突然、黒い雲が空一面に広がった。雷光が走った。雷鳴が轟く。大粒の雨が落ちてきた。雨が土砂降りとなった。滝のような雨だ。水のカーテンが張り巡らされ、湖面の水鳥が消え、湖も消えた。テーブルも消え、木実

子も消えていた。彼はただひとり水のなかに閉じこめられていった。

「木実子、木実子……」

自分の声に、彼は目を覚ます。

隣に木実子がいなかった。不吉な予感がした。彼は藪から抜け出し、水辺に走る。彼女の足跡はなかった。なんの痕跡もなかった。

藪の周りを探した。大声で呼ぶ。なんの反応もなかった。彼は辺りを何度も探し回った。だが木実子の姿はどこにもなかった。

4 1

「今日、緊急にお集まりいただいたのは、ほかでもない、日本で暗躍する『黒の集団』に関することだが……」

アムンのカン高い金属性の声が響く。奥の壁を背にする席にアムンの姿があった。彼は細長い大きなテーブルの奥の端のから、向かい合つて両側に席を取る十数人のメンバーに交互に目をやり、話をつづける。

「『黒の集団』についてはこれまでさまざまな情報があつたが、われわれのまえに現れることがなかったし、われわれもいまままで目にすることはなかった。ところが、先程、ついに、われわれのまえに姿を現したのだ。」

『黒の集団』に遭遇したのはテーブルの端にいるふたりだが、紹介しておこう……」

アムンは右手を差し伸ばし、未佐と耀を紹介する。テーブルに席を取っているひとたちは「天の組織」の正式メンバーの面々だった。

「このふたりを追つて現れた……」

アムンはふたりが「ミノムシ」を空中輸送したとき、突然「黒の集団」の精鋭が現れたのだという。

未佐はあのととき突然襲ってきたヘリコプターを思い浮かべる。あれが「ミノムシ」を奪回しようとして追ってきた「黒の集団」の精鋭だったのか。でもなぜすぐ引き返してしまったのか。

アムンが一段と声を張り上げた。重要なことを言うときの癖だ。

「『黒の集団』の連中は、われわれの姿を捉えたようだ。彼らは透明物体を認識できる装置を装備しているらしいのだ……」

未佐はアムンをじつと見る。アムンが陰でメンバーを手配し、未佐と耀を守ってくれていたのだ。だから、ヘリコプターが未佐と耀を追いかけたのに、湖の周囲に潜んでいる「天の組織」のメンバーに気づき、ふたりを捕まえようとせずにすぐ引き返していったにちがいない。

「いままで姿を見せなかった彼らがなぜ急に現れたのですか。なにか特別の訳があるのですか」

メンバーのひとりが尋ねる。

「真意はわからないが、彼らは戦略を転換したのではないかと思う」

「なぜ、そう推測するのか。なにかそう考えうる理由とか根拠といったものがあるのですか」

「このところ、彼らをとりにまく事情が急変している。それにわれわれ側の動きにも変化が生じているし……」

「それは……」

「われわれの側の変化から話すと……」

アムンは未佐と耀が新しく参加したこと、そしてふたりの産廃処理場焼却炉爆破に関するこれまでの行動を詳しく紹介する。

「そのような行動を認めたのは、将来『黒の集団』との全面対決を招くことになることを予想してのことですか」

「勿論そうだ。ふたりの行動を容認するというより、むしろこれを積極的に推し進めることにしたのだ。問題はなぜそうしたかだ。実は……」

アムンは左右に連なるメンバーの面々の一人ひとりに目を移していく。

「実は、最近になった『黒の集団』に新たな動きが現れた……」

アムンはその動きを戦略転換とみているのだ。

「当初『黒の集団』は日本社会を化学合成物質の影響、ことに複合影響の生体実験の場と考えていた。より多く売り込むための安全性チェックを考えてのことだ。だがいま彼らは別のことを考え出しているようだ。これまでの経緯からはじめると……」

アムンは未佐と耀に話したことをさらに詳しく繰り返しながら、日本の状況におよぶ。

「黒の集団」は古代エジプトから中世ヨーロッパ、そして近代、今日の現代科学技術文明へと綿々とつづく錬金術師の秘密結社グループの流れを汲む一派だ。近代に入って、彼らが合成化学を著しく進歩発展させ、花を咲かせる。こうして今日の化学工業の基礎がつけられたのだ。

欧米諸国における化学工業の興隆にともない、数多くの化学合成物質を安価に大量につくり出せるようになった。大量の化学合成物質がさまざまな商品や製品に採用され、市場に出るようになる。

化学合成物質は天然物と比べると、安価で使い勝手がよく、均一で商品の出来具合もよいが、思わぬ副作用が生じることがあった。ことに、自然界に存在しないものまで合成されるようになって、副作用への問題意識が高まっていった。このため、事前に人体へ影響についての安全性テストが

行われるようになったが、個々の化学合成物質の影響はともかく、さまざまな化学合成物質との複合影響となると極めて難しいし、カネも時間もかかる。そこで考え出されたのが、実社会での生体実験だった。

これは実社会に直接新しい化学合成物質を持ち込み、実社会における反応や影響を見ようというものだ。

そこで目がつけられたのが、これまでさまざまな化学合成物質を大量に消費してきた化学合成物質漬けの日本だった。

日本は太平洋戦争後、急速に経済を成長させ、工業生産は倍々で増加していく。化学工業も隆盛をみ、やがて、GNP世界第二位の経済大国となる。生産が拡大する一方、消費もうなぎ登りに増大していったのだ。

日本社会には化学合成物質が充ち満ちている。毎日口にする食品には数多くの化学合成物質が添加物や保存料、着色料や発色剤あるいは香料として広く用いられているが、日本で消費される化学合成物質全体からみて、これはほんの一部で、日常生活をとりまくあらゆる物資や日用品にさまざまな化学合成物質が大量に含まれているのだ。薬品、サプリメント、化粧品などはもちろん、各種の建材や電気製品、包装材料や食器あるいはバンパーをはじめ自動車の各部品など、多くの商品や製品にも多用されている各種プラスチック樹脂類はまさに化学合成物質そのものであるが、いまや現代生活に欠かせないものときえなっているように見える。

これに加え、殺虫剤、殺菌剤、除草剤、化学肥料などさまざまな農薬をいたるところに大量に散布している。これは化学合成物質そのものであり、日本ではこれをところかまわず、田畑はもちろん、山間地の森林、都市部の公園や庭園、一般家庭の生け垣や花壇、家庭菜園で日常的に散布されている。森林や田んぼでは飛行機で大量の農薬が空中から散布されることも

ある。こんなふうには生物生態系に直接打撃を与える農薬を大量に使用している国は世界でも珍しく、国土が狭小なだけに、単位面積当たりの農薬使用量では日本が世界第一位だ。

その一方で、経済成長とともに、乱開発が進み、国土は荒廃し、環境は汚染され、いたるところにゴミの山ができていく。

一九七〇年代前後から、各地でさまざまな公害が顕現化しだす。これらは成長一本槍の経済活動優先の歪みの現れといわれたが、四日市ぜん息、水俣病、イタイイタイ病、カドミウム汚染、ヘドロ堆積など、これらはすべて特定企業による生産過程から環境へ放出される廃棄物が原因だった。

それが一九八〇年代前後に、汚染物質の発生源が不特定多数へと広がっていく。自動車排ガスなどによる光化学スモッグや、工場廃水、生活排水による河川や湖沼あるいは沿岸海域における広域にわたる水汚染あるいは水質汚濁生などの地域的広域汚染現象に加え、酸性雨、オゾン層破壊、海洋汚染といった地球規模に広がる超広域環境汚染が発生する。

これらは生産過程や消費過程、あるいは廃棄過程で環境へ放出漏出される化学合成物質によるものだ。

このように、日本社会は化学合成物質で生活を豊かにする一方で、化学合成物質の環境汚染に悩まされていたのだ。

「日本の住民たちが生活の豊かさの代償をこんな形で支払わされているとしても、このようなことは『黒の集団』にとつてどうでもよかったことだ。だが、その結果、日本においては口から直接入る化学合成物質といい、日常生活で直接接する化学合成物質といい、また、化学合成物質で汚染された環境といい、その種類や量は他国に比べて桁違いに多いのだ。そのうえに、対象人口もずば抜けて多い。さらに魅力的なことは、日本が島国で周

りが海に囲まれており、他国と断絶されていることだろう。このような優れた条件のもとで、『黒の集団』は新たに開発した化学合成物質の生体実験プロジェクトを実行していったのだ……」

「それがなぜ戦略転換を……。実験が失敗したのですか」

「いや、確かに時間がかかりすぎたが、決して失敗ではなかったろう。実験の過程で思わぬ発見があったからだ。それはそれでいいのだが、それより問題は、地球人社会の暴走傾向がこのところ急速に強まってきていることだ……」

「地球人社会……。ああ、人間社会のことですね。その暴走傾向……。なにがはじまったというのですか」

「いま地球人社会が謳歌している現代文明は巨大化高度化大量化を指向しているが、この数十年の間に地球人（人間）のコントロール能力を超えるまでに巨大化高度化大量化が進んでしまっているのだ。それにもかかわらず、これを抑制することもせず、地球人社会はさらなる巨大化高度化大量化へと邁進している。まさに制御不能の暴走状態にあるのだよ。たとえば、地球の人口はこの三〇年で倍増し、七〇億人を超えてしまった。この調子でいけば、まもなく、一〇〇億人に達することになるだろう。こうなつたとき、地球は一体どうなるか。そこで『黒の集団』は考えたにちがいない……」

「なにをどう……」

「強欲な『黒の集団』のことだ。このままでは……」

「一〇〇億人にもなれば、地球が食い尽くされてしまう。自分たちの取り分が脅かされるばかりか、これまで貯め込んできた分まで奪い取られてしまう……」

「その通りだ。このまま進めば、地球人社会は自爆するほかない。地球人社会はいま、コントロール能力を超えて巨大化高度化大量化の一途を辿り、自滅へ向かつて邁進（暴走）している……」

「自滅してはともこうもない。で、『黒の集団』の新しい戦略は……」

「それだ。これまで彼らは地球人社会において現代文明の目指す巨大化高度化大量化に手を貸してきた。そして資本主義のもとで自由主義経済を標榜し、市場原理を建前に市場の拡大と支配をはかり、世界中の富を独占しようとしてきた。だから巨大化高度化大量化も限界が見えてきて、自分たちの行動がかえって地球社会の自滅を早めていることに気づいたのだろう。そこで戦略転換に思い至つた、ということだろう。とすれば、彼らは……」

「地球を化学合成物質塗れにして、なにをいまさら言つてんだ、やつらは」
「彼らはずつと、地球を無限性の支配する世界だと思ひ込んでいたんだ。だが地球の人口が七〇億人を超え、一〇〇億人も間近となると心配になってきた。実際、現在ですら、数十億人もの人びとが水や食料の不足に悩まされているのを目の辺りにして、地球無限信奉もぐらつきはじめたんだろ。彼らにしてみれば、科学技術の高度化のもとで新しい化学合成物質をじゃんじゃんつくり出していけば、一〇〇億二〇〇億の人口も養えると踏んでいたにちがいないからな。彼らにすれば、巨大化高度化大量化がすべてを救はずだった。巨大化高度化大量化をつづけていけば、儲けもそれだけ大きくなっていくと思ひ込んでいたんだ。だがコントロール能力を超えた巨大化高度化大量化の果てに一体なにが待っていたか……」

アムンは過去から未来へと時の流れをなぞるように、目を細める。

地球の高等動物人間がダイナマイトを掌中にしてから、狂つたように殺戮兵器の巨大化高度化大量化に励みだす。そして原爆、水爆を開発してし

まう。核分裂、核融合の巨大なエネルギーで、瞬時に大都市を破壊し、大量の人間を殺傷するのだ。要は、これを用いて、「邪魔者」を殺ろそうというのだ。

太平洋戦争末期、広島と長崎に原爆が投下された。一九四五年のことだ。核エネルギーの研究開発において何度も事故を起こしてきたにもかかわらず、原子力エネルギーの平和利用を目論む。原子力発電技術の実用化を図り、世界中に原子力発電所を建設していく。世界にはすでに数百基を超える発電用原子炉を稼働させているのに、いまだに使用済み核燃料や放射性廃棄物の安全な処理方法が確立されていない。そのうえ、何度も大小さまざまな事故を繰り返してきた。

そしてとうとう、米国、ソ連(当時)、日本といった原子力発電技術の先進国において、原子力発電所の重大事故を引き起こしてしまうのだ。スリーマイル島原発、チェルノブイリ原発、フクシマ第一原発で炉心溶融(メルトダウン)を引き起こし、原子炉の底に穴を開ける。そのうえに、フクシマ第一原発では水素爆発を起こして、コンクリートの頑丈な原子炉建屋を木端微塵にした。

その結果、大量の放射性物質が大気中へ放出され、大気中を舞い、世界中に広がっていく。大量の放射性物質が地面や海面に降下し、土壌や森林、田畑、生態系、湖沼、河川、街や都市を広い範囲にわたり汚染する。これらの放射性降下物は雨水や地下水に流され、河川から海洋へと汚染が広がる。さらに、大量の放射能汚染水を海へ放出してしまう。

こうして一ヶ所の原子力発電所から地球規模の放射能汚染が生じた。そして何年も何十年にもわたって環境を汚染しつつ、生物濃縮を通して人びとはさらに高レベルの放射線被爆にさらされつづけることになるのだ。

「これは一例に過ぎないがね。コントロールができませんのに、儲けを大きくしようと、それを無視して巨大化高度化大量化へ邁進し、揚げ句の果てに、何万倍何億倍の損失を招いているのだ。何度も失敗を繰り返しながら、全然懲りない。地球上の人間という生きものは一体どういう生きものなのか……」

アムンはメンバーを見回し、最後に、未佐と耀に目を留める。

アムンの刺すような視線を受け、未佐は隣の椅子にいる耀の手を握りしめ、この数日の出来事を思い返す。産廃処理場での焼却炉爆破はなんのための行動だったのか。木実子と森野を助けるための行為にちがいないが、それがどういう意味を持つかが計りかねていた。ふたりを救うだけなら、一〇〇基を超える焼却炉を爆破する必要があったのだろうか。

「『黒の集団』は過剰に生産した農薬(化学合成物質)を日本に売り込むために、産廃処理場やゴミ処理場の焼却炉から放出されるダイオキシン問題を利用しようとしていたらしいことは分かっている。売り込もうとしている農薬に少量のダイオキシンが混入しているからだ。社会の関心が産廃物や一般廃棄物の燃焼にともない発生するダイオキシンに目が向けば向くほど、彼らにとつて都合良かったのだ。だから、今回の焼却炉爆破事件にも極めて興味をもって監視していたにちがいない。そしてわれわれ『天の組織』が関与していることを知った。これで彼らはどう出てくるか……」

アムンはじつと未佐を見ていたが、しばらくしてまた口を開く。

「彼らの巨大化高度化大量化指向で地球における環境破壊や環境汚染が著しい。今回の出来事で、これに歯止めをかけようと『天の組織』が動き出していることが彼らにも分かったことだろう……」

「戦略転換は……。日本での生体実験は……」

メンバーのひとりがアムンの話を遮るように、性急に口を挟む。

「これまでの戦略は転換されるが、多分、日本での生体実験は別の形でつづけられるだろう。世界人口の激変、とくに途上国での人口爆発的激増と先進国での人口の急速な高齢化と少子化という状況変化を踏まえて、これまでの化学合成物質の安全性の観点からの個体への影響に関する生体実験は止めることになるだろう。だが、化学合成物質の別の影響、とくに生殖への影響を掘り下げて実験をすすめるのではないかと思う。というより、この種の影響をより効果的に高める方法の開発をめざすかもしれない。日本は世界のテストケースだという位置づけは変わりないだろうけれども、その成果は別の国々向けだろうが……」

「日本での実験はいままでと変わらないということですか」

「われわれが関与していることを知った以上、これまでよりもさらに巧妙な方法で行うことになるだろう。これだけは間違いない。だがいまのところ、わたしにはそれがどんな戦略のもとでどんな方法になるかまではまだ分からないけれども、いまからそれに備え、あらゆる場面に即応できるように準備をはじめておきたいのだ。そこで、ダイオキシン汚染問題で産廃処理場焼却炉爆破に加わったミサとヨウには、今回の経験を生かし、万全の準備を行い、期待にこたえてほしいと願っている。諸君、頼みます」

「黒の集団」はどんな戦略に転じようというのか。「黒の集団」がダイオキシンばらまきから撤退するのに引き換え、どんな戦略で、どんな作戦を行おうとしているのか。

アムンはメンバーを見渡した。

未佐にはこれからどんな日々がはじまるのか、皆目見当が付かなかった。

一瞬、逃げ出したいと思った。

アムンの視線を感じて、未佐は耀に促し、椅子から立ち上がる。アムンは右手を伸ばし、大きく頷く。

メンバーがふたりを拍手で迎えた。

42

「なんだって、こん畜生。いままでさんざんおれを利用しておきながら、なんちゅこつた……」

大男は顔を紅潮させて歯ざしりし、ベッドから立ち上がると、身体をわなわな震わせ、携帯電話を思い切り壁に叩き付ける。

「おい、やられた炉は……」

「は、はい……」

病室の隅で縮こまって立っていた若い男が飛んでくる。

「うちのほかは……」

「ありません。やられたのはすべてうちのものでした。一三五基すべてが破壊されました」

「……」

大男は無言で頷く。

やはり、あの連中の言う通りか。あの女の仕業とばかり思っていたが、そうでなかったか。では誰の仕業か。あれだけの数の焼却炉を爆破するとすれば、かなりの人手と時間がかかるだろう。

大男はこの数日の出来事を振り返る。いくつか奇妙なことがつづいた。じつと考え込む。宙を舞う名簿のことも、爆破で吹っ飛んだ「ミノムシ」の残骸が全然見つからないのも不思議なことだった。

確かに、連続爆破が起きたのは、あの女を捕らえ、廃材の山に吊るした後だった。かといって、連続爆破に女が関与していないと言えるのか。時限爆弾という手もあるではないか。前の晩に焼却炉に仕込まれていたダイナマイトが、火入れした途端に爆破したと考えることもできるはずだ。

大男には腑に落ちないことがあった。あの連中がいう「別の大きな力」がやったとはどうしても思えない。もし、別の大きな力がやったのなら、その証拠はなんだ。証拠をはっきり提示せずに、一方的に今後関係を一切切ると通告してくるとはどういうことだ。それにこれまでも全然関係がなかったことにするとはなんだ。

大男は胸の奥からふつふつと怒りが込み上げてくるのを感じた。無性に腹が立ち、腹の中が煮え返った。もう我慢ができなかった。

かといって、一三五基もの焼却炉を復旧することは、自分にはできなかった。なんとかしてあの連中からカネを引き出そう。その方法は……。

「おい、焼却炉の爆発のときの状況を調べるんだ。いつ、なにをしたとき、爆破が起きたかだ。焼却炉の位置と爆破の順番だ。地図に書き込むんだ。いいな」

若い男が病室を出ていくと、大男はゆっくりベッドに戻り、横になった。なんとかしてあの連中からカネを引き出す方法がないか。大男は病室の白い天井を見ながら、一生懸命頭を巡らす。

じつと天井を見ていると、天井がどンドン上に昇っていったり、逆に、上から下りてきてベッドに迫ってきたりする。片目には落下する天井が切

り込む刃のように迫る。大男は迫ってくる天井の刃に切り刻まれそうになって、何度も悲鳴を上げる。

こんなことを繰り返しているうちに、大男は次第に平静さを取り戻していった。そしてなにかが狂っているように思えてくるのだった。

大男は得体のしれない男から誘われて産廃処理業をはじめた。黒っぽいスーツで身をかためた男は「オレのほうで処理処分する産廃廃棄物を集めて持ってくるから、焼却処分を頼む」といった。そして焼却施設の建設資金を出した。条件は規制外の小型（焼却炉）施設に限るという。理由は持ち込む産廃廃棄物の量が日によってまちまちだからということだった。

男はつぎつぎと産廃廃棄物を持ち込んだ。特定有害産廃廃棄物のポリ塩化ビニル（PVC）類が多く混入していた。持ち込まれた産廃廃棄物はすぐ焼却することになっていったのだが、多すぎて思うように焼却できず、産廃処理場は産廃廃棄物でぐっぐっ満杯になってしまふ。そこで新しい産廃処理場の敷地を見つけては、つぎつぎと小型焼却炉を設置することになったのだ。

そんなふうにして営々として設置してきた一三五基の焼却炉がすべて破されてしまったのだ。

突然、大男の頭にひとつの思いが浮かんだ。もしかしたら、焼却炉を爆破したのはあの連中の仕業ではないのか。脳裏をかすめた思いがけない思いに、大男はじつと天井を見つめる。大男は「おれはもうご用済みということか」と力なく呟く。

大男はふと、名簿が宙を舞ったことを話したとき、すでにあの連中はそのことを知っていたことを思い出した。ということは、誰かが事前にあの連中に伝えていたからじゃないか。すると、うちのなかにスパイがいると

いうことか。それとも、あの連中はおれを四六時中見張っていたのか。

やおら、大男はベッドで上半身を起こす。スパイがうちの内実をすべて報告しているのなら、あの連中をいくら説得しようと、焼却炉の復旧はムリだ。まして連中が見張りをしていたならなおのことだ。なにしろ、最近はそのいい他の収集運搬業者からの産業廃棄物を優先して焼却していたからだ。車で追い回してあの女を捕らえた夜中も、そんな特別の産業廃棄物を焼却しようとしていたときだった。

産廃処理場や焼却炉の復旧はやはりムリかもしれない、と大男は思った。だが使っている男たちのなかにスパイが潜んでいたとは思ってもみなかったことだった。部下に裏切り者がいるようとは考えることができなかった。

大男は怒るまえに、裏切られるような自分が情けなかった。

たとえスパイがいなかったとしても、連中が見張っていたとすれば、頭から信用されていなかったことになる。

「ああ……」

大男は胸の奥から搾り出すような悲鳴を吐く。

すべてが終わったような気がする。大男はふたたび身体をベッドに横たえると、天井をじつと見ていたが、しばらくして目を閉じてしまう。

大男はしきりに考えたが、なにもいい考えが浮かばなかった。

43

木実子は道に迷った。それでも彼女は足を引きずりながら、歩きつづける。歩いて歩いても行き先が見えてこない。彼女はひたすら歩くほかな

かった。

車があればいいのに、と思う。警察の駐車場に置いてきた車が目に浮かぶ。彼女は車を思い浮かべながら、重い足を運ぶ。

藪から抜け出ると、彼女は湖畔を回って対岸に出た。街へ行くつもりだった。だが方向を間違え、反対の道へ入っていったらしい。途中で間違えに気づいたが、彼女はそのまま進んだ。

森を抜けると、見覚えのある道路に出た。以前、例の産廃処理場から逃げたときに通った道路だった。右に行けば、産廃処理場だ。左に行けば、かなり離れているが、街に出るはずだ。

彼女はふと、右へ行く誘惑に駆られた。爆発のあった産廃処理場を覗いてみたいと思った。廃材の山に「ミノムシ」吊りにされ、爆破で宙へ飛ばされたところだ。

彼女は立ち止まり、しばし思案に暮れる。産廃処理場に行けば、すぐ捕まってしまうだろう。だが爆破のあとを見たい。廃材の山頂に立てられた古びた柱に吊るされている「ミノムシ」を思い浮かべると、ゆらゆらと揺れていた感覚が戻ってきた。

身体が独りでに揺れる。揺れる方向へ身体を傾けると、足がまえへ出た。彼女は行き先も定めぬまま、身体の揺れにまかせて夢遊病者のように歩き出す。

トタン張りの長い扉の横を通り抜けた。気がついたときには、産廃処理場のゲートのまえに来ていた。

ゲートは開いたままだった。爆風で壊れたのか、扉の一部がレールからはずれ、風に揺れている。

彼女はおそろおそろなかを覗く。廃材の山は吹っ飛び、敷地一面に廃材

のかけらや板切れ、塩ビ類などが飛び散っていた。ゲートの奥にある事務所
の窓ガラスは飛び、透けて見える。なかには人影はなかった。

彼女は瓦礫をぬって、敷地の中へぐんぐん入っていく。敷地をぐるぐる
回っても、瓦礫しかなかった。

焼却炉建屋は以前の爆破で焼却炉ともども破壊されてすでになく、土台
のレンガだけを残しているだけだった。根元から折れた煙突は離れたところ
に転がっている。

「おい、なにしているんだ……」

突然、背後から大声がした。振り向くと、いつ現れたのか、頭の頂上が
丸く禿げた六〇前後のずんぐりとした年配の男が棒切れを片手に立ってい
た。どこか間の抜けた感じの男だった。

「なにがあつたんですか、こんなになつてしまつて……。社長さんですか
……」

彼女はしらっぱくられて口元に笑みを浮かべ、男に近づく。

「社長はいないが……」

近づく彼女を警戒するように目をしばたかせ、男は一步後退する。

「社長さんにお会いできませんか。どこですか……」

彼女は高圧的に出る。

「入院している……」

「どこかお悪いのですか……」

「ガラスの破片で目をやられて……」

「まあ、どこですか。近くの病院ですか……」

「街のほうの……」

「不躰ですが、連れていって貰えませんか。是非、お会いして……」

彼女は自分でもなにを言っている分からなかった。咄嗟に、口を突いて
出たのだ。どうせ連れていってくれることはないだろう。

「そんなこと急に言われても……。一寸、待つてください。いま、社長に
聞いてみますから」

男はポケットをごそごそ探し、携帯電話を取り出すと、木実子の顔をち
らつと見てから、二、三步離れて後ろ向きになった。彼女もゆっくり数歩
反対の方向に歩いて、男と距離を取った。男は電話に気を取られ、彼女の
動きに気づかない。このままゲートに向つてもよかった。外へ出ていつ
も、男は気づかなかったかもしれない。

彼女は街まで出たかった。かといって、歩いていけそうもない。彼女は
男の電話の終わるのを待った。

「どんな用件か、と言つてますが……」

男が近づいてきた。

「とても重要な話です。会つてからお話します」

彼女は電話の相手にも聞こえるように大きな声で言う。男はまた二、三
歩後退して離れる。

彼女は年配の男に構わず、ゆつくりした足取りでゲートに向つた。

44

森野は湖畔の草むらに腰を下ろし、対岸に目を向けたまま、何時間もじつ
として動こうとしなかった。まだ紅葉には間があつたが、時折、湖面を吹
く冷気を含んだ風が頬を撫でる。

何時間も周囲を探したが、とうとう木実子を探しだすことはできなかった。途中何度も彼女が姿を消した藪のそばに戻ってみるが、彼女は戻っていないかった。それでもいつかは戻ってくると思いい、藪のそばでじっと待った。

いつまで待っても、彼女は現れなかった。それでも、彼は藪のそばから離れようとしなかった。ここを離れば、彼女と二度と会えないような気がしたからだ。

彼女はどこへ行ってしまったのだろうか。彼はあれこれ考えるが、どこへ行ったかどうしても思いつかなかった。足を痛めている彼女がそう遠くまで行くはずがないと決めつけていたが、もしかしたら、もっと遠くへ行ってしまったのだろうか。

彼はもつと範囲を広げて探してみようかと思った。それにしても、なぜ眠っている隙に、姿を消したのか。なぜ黙って出て行ってしまったのか。

焼却炉爆破に反対したからだろうか。小型焼却炉を何基爆破しても、大気中のダイオキシン濃度の削減にはさほど効果がないのが分かっているのに、なぜやるのか。単なる気休めにすぎないのじゃないかと言ったことが気に入らなかつたのか。それとも、別の理由があるのだろうか。

彼女が焼却炉爆破にのめり込むように熱中していった訳は分かっていた。一人息子の耀が焼却炉爆破に巻き込まれて幼い命を失ったことが自分のせいであると思いい込み、それがトラウマとなつて彼女を追い込んでいたからなのだ。それをなんとか断ち切つてやりたくて、あえて強く言つてしまったことがあだとなつたのか。

彼は女心に無頓着だつた自分を責める。いても立つてもおれず、彼は腰

を上げると、あてもなく歩き出す。

45

「社長はオーケーだそうですね」

後ろから追いかけてきた男が木実子のまえで薄笑いを浮かべる。

「そう、じゃ……」

一瞬、胸のなかを動揺が走る。彼女は胸の内を感じ取られないように、素つ気無くあつさり応える。

まさか、社長が簡単に話にのつてくるとは思つてもみなかつた。一体、社長にどのように話したのか。彼女が男に尋ねようとしたとき、男は「車を持つてくる」と言い、そそくさと塀の外へ走つていった。

車は路上に駐車しているのだろうか。彼女はゲートまで歩み寄り、男を待つ。なかなか男は現れない。ゲートから外に出て辺りを見回しても、近くに、駐車している車はなかつた。

どこに車を取りに行つたのか、車はなかなか来ない。彼女は目を凝らして辺りを窺うが、遠くにも車影とおぼしきものは全然認められなかつた。

彼女はいらいらしながら、ゲートのまえを歩き回る。

それにしても、社長はよく応じたものだ。男がなんと話したか分からないが、彼女は逆に、会おうと応じた社長に興味を感じた。あの年配男はまさか爆破犯の女だと感付いていないだろうが、社長はもしかしたら感付いているのかもしれない。だから、会おうと言つたのだ。どうする。彼女は考え込む。

突然、あらぬ方から車の近づく音がした。車にはあの男が乗っていた。見知らぬ若い男が運転し、助手席で初老の年配男が笑みを浮かべている。

車が木実子のまえに静かに停止すると、曖昧な笑みを口元に浮かべながら年配の男が後部座席のドアを開ける。彼女は押し込まれるように背中を押され、後部座席に乗り込む。年配男が乗り込むと、ドアロックの音がして走り出す。

若い男がルームミラー越しにバックシートに目を走らせ、ときどき木実子に窺う。彼女は素知らぬ振りをして車窓に目をくぎ付けにし、初めての風景を楽しんでいる風を装っていた。

ドアロックの音がしたとき、この二人が自分が爆破犯人だと感付いてると彼女は思った。彼らは彼女を逃がすまいとロックしたのだ。

「社長さんのお名前を伺えないかしら……」

「ねえ、おにいさん」と呼びかけようとして、彼女は慌てて口を噤む。この連中にはあくまでお淑やかに振る舞うのだ。そして彼らが油断した隙に逃げ出そう。こう考えながらも、もう一方で、社長が会うというのなら会ってみようかとさえ思う。

「社長の名前ねえ。おい、お前知ってるか」

年配の男が若い男を見る。

「『やすい』と言うんだろ」

『そうだ。安井金平糖だったな』

「コンペイトウじゃないよ」

「そうだな。社長は『安井金平』というんですよ」

年配の男が助手席から振り返る。

「あ、そうですか。安井さんとおっしゃるのね」

彼女は二人のやり取りを聞いていたが、知らぬ振りをして車窓の外へ目を向けたまま応える。

車は街へ入った。急に車が増える。

「警察署はどこかしら」

「え、警察ですか」

「そう。この辺の産廃処理場で爆破事件が頻発しているそうですね。そのことについて取材したいの」

「すると、新聞記者かテレビ局の人なの、あなたは……」

「さっきの産廃処理場でも爆発があったんでしょう。なんでも、ふたりの人間を廃材の山に立てた柱に吊るして火をつけたそうですね。警察も殺人事件の疑いで捜査をはじめたそうですわ。あなたたち、知っているんですよ。たとえば、誰が誰に命じられて火を放ったのか、吊るされた二人はどんな人だったのか……」

年配の男と若い男が顔を見合せている。

「社長に取材するために……」

「たまたま近くに遊びに来ていたので……、まあ、そのついでとっていかしら……」

彼女は車窓に目を据えたまままだ。

「あそこが警察署ね、ちよつと寄って戴けません？」

「え？ いまですか。後にしてくださいよ。社長が待っていますから。病院は信号を左折したところですよ」

年配の男は青い顔をして、ときれとぎれに言う。

木実子は男の青い顔を一瞥し、爆破犯の女が記者だったとなると、社長はかんかんに怒りだすにちがいないと思う。産廃処理場での殺人事件の取

材となれば、なおのことだろう。

車窓に向けたままの彼女の顔に薄笑いが浮かんだ。

46

病室は三階にあった。若い男が見張り役になって、木実子を廊下に待たせ、年配の男だけが病室に入っていく。

病室から年配の男のいつもと違った妙に甲高い声が聞こえてきた。

「社長、女を連れてきました。廊下で待たせてありますが、例の爆破犯かどうか分かりません。本人は記者で、取材だと言っているのですが……」

しばらくして、年配の男は白髪頭を掻きながら廊下に出てきた。木実子につづいて、若い男も病室のなかへ入る。

大男はベッドのうえで胡座をかき、何も言わずに、入ってきた木実子に目の辺りを包帯した顔を向け、包帯の間から覗いている片目でじっと見つめている。

木実子は自己紹介して、大男に目を向けた。

個室とはいえ、ベッドで一杯の大ききで、丸椅子が二つしか置いてない。

木実子には椅子を勧めたものの、男たちは壁際に立ったままだ。

彼女は椅子をベッドに引き寄せ、大男の近くに腰を下ろす。

「まえにお会いしたことありますかな」

大男は見た目よりも年配なのか、木実子を片目でじろろ見ながら落ちて着いて口を開く。

「さあ、なにしろ、毎日大勢の方にお会いしますので、もしかしたらお会

いしているかもしれませんわ……」

彼女は愛想笑いを浮かべる。

「で、ご用件は……」

「おたくの産廃処理場の廃材置き場で爆発が起きたとき、廃材の山の頂上に二人の人間が柱に吊るされていたとか、本当ですか」

「誰がそんなことを……」

「そこに立っている二人が……」

木実子はやつとすると

男たちは慌てて打ち消す。

「で、誰が廃材の山に火をつけたのですか」

「火を……」

大男は尖った目をした。

「ええ」

木実子はゆっくり返事する。

「あんた、焼却炉爆破犯だろ、そのチェックのシャツは見覚えがある……」

大男は掴みかからんばかりに、身体を乗り出す。

「……………」

彼女は一瞬はつとした。見破られたかと思った。

「いくら探しても見つからんはずだ。生きて逃げ隠れていたんだな。もうひとりはどうした。どこにいる……」

大男は木実子に片目を近づける。舐めるような眼差しだ。壁際の男たちの目も険しくなった。

「包帯の方の目はどうなされたのですか。ケガですか。飛んできたガラスの破片が刺さったとか……」

彼女は咄嗟に話題を変える。

大男は氣勢をそがれたのか、一瞬黙り込んだ。

彼女は大男を見据えながら、洋服は昨日から着のままだったことを思い出した。だがロープをぐるぐる巻いて「ミノムシ」にされたときには裸電球の街灯の薄暗い灯のみだった。ブラウスのうえにジャンパーを重ねていたのに、この男に襟元が見えるだけのブラウスの柄が分かるだろうか。それがチェックだなんて、分かるはずがない。この男の言ははったりだ。はったりがちがない。はったりさらにさらに強いははったりを返すのだ。彼女は攻勢に出る。

「火をつけたのは安井金平、あなたですね。なぜ火をつけたのですか。二人の人間を吊るしておきながら、火を放つとは、まるで火炙りじゃないですか」

「……………」

「あなたは柱の二人を殺そうとした。これは明らかに殺人罪だ」

「別に殺そうとしたわけではない。焼却炉を爆破した見せしめに燻りだそうとしただけだ。ところが……………」

「その二人が焼却炉爆破犯だというのですか。なにか証拠となるものがあるのですか。あなたが勝手にそう決めているだけじゃないんですか。二人は無罪放免になって警察を出てきたところだったのでは……………」

「おれは証拠を握っている。まえにも捕まえたことがある。しゃあしゃあもありもしないこと抜かしやがって、お前は爆破犯にちがいない。このあはずれ女、警察に突き出すぞ」

大男の日焼けした大きな顔はみるみるうちに紅潮し、赤黒くなる。そして「おい、なにを問抜けた顔をしている。早く、一一〇番しろ。こいつを

警察に突き出すんだ」と壁際に立っている男たちに向ってがなり立てる。

「社長、落ち着いてください。このひとはくる途中警察署に寄りたいたっていただけですが、帰りにも連れていかれますよ。それよりも、いま一一〇番したら、社長も一緒に警察に行くことになりませんが、それでいいですか」

「なんだと、お前。どうして、おれが……………」

「警察は殺人事件の捜査をはじめているという話です。証拠が固まり次第、犯人逮捕に踏み切るとのことです」

「なにを抜かしておるんだ。お前……………」

「このひとがよしんば爆破犯人だとしても、そうであればなおのこと、警察に突き出すのは暴挙です。『ミノムシ』にされた爆破犯人は『ミノムシ』殺人事件の被害者であり、廃材に火を放った社長の行為の証人でもあるじゃないですか。爆破犯人を警察に突き出すことは、自ら『ミノムシ』殺人事件の証拠を警察に提出するようなものです。おれが爆破犯人を『ミノムシ』にして火を放ち、焼き殺そうとした……………」

「なんだと。お前、誰に向って言っているんだ……………」

大男の赤黒かった大きな顔が青ざめ、どす黒くなった。掌を強く握りしめ、ふたたび顔を赤くして怒りだす。

木実子は黙って、大男と年配の男のやり取りを窺っていた。

「警察は証拠をみつけないことはできない。爆破犯人の遺体はどこにもないし、現場をみていたものは誰もいないからな。いいな。黙っていれば、おい、お前さんも、爆破犯人とならずに済むからな」

大男は急に態度を和らげ、壁際の男たちと木実子を交互に見ながら、言

い含めるように言う。だが目は怒り、増悪に燃えていた。

もはや彼女にはこれ以上長居する必要がなかった。壁際の男に「じゃ、送ってちょうだい」と目配せすると、椅子から立ち上がり、大男に軽く会釈して病室を出る。

背後に刃を突き刺すような大男の視線を感じた。いつかまた、大男と会い見ることがあるような気がした。だが彼女は振り返ることはなかった。

男たちは警察署のままで車から木実子を降ろすと、すぐ走り去っていく。彼女は正面からエントランスホールへ入ると、そのまま、中央の廊下を通り抜け、裏口から駐車場に出た。

駐車場の片隅に見覚えのある車が駐車してあった。彼女はドアを開け、いつも森野が座っていた運転席に身体を滑り込ませる。彼女はハンドルを軽く握る。エンジンがすぐ回転音を響かせた。

ゆっくり駐車場を出ると、車は街の中へ入っていった。

(第一巻 完)

(これはフィクションであり、実在の個人や組織体とは一切関係がありません)

天翔け地這う 第一巻 人間燻製

生野以久男

二〇一二年一月三十一日第一版発行

© Ikuno Ikuno 2012

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし